

令和7年度 愛陶コレクション展「世界はやきものでできている」 特集展示 展示記録

佐久間 真子 編

(愛知県陶磁美術館 主任学芸員)

当館は2024年度からの長寿命化のための長期修繕を終え、2025年4月1日(火)に再開館した。本館2階で開催してきた従来の常設展も、愛陶コレクション展「世界はやきものでできている」としてリニューアルオープンした。同展内には、中国・世界・日本の陶磁史を紹介する「中国のやきもの」「世界のやきもの」「日本のやきもの」からなる通史部分と、陶片資料を古窯跡と併せて紹介する「窯の記憶Ⅲ」部分とともに、1年度を3期に分けて各期に6~7つのテーマを設定し作品を入れ替える「特集展示」部分を設けた。

「特集展示」は、本館2階展示室2-Bおよび通路を会場とした。通史部分を補完するテーマや特別展・企画展に関連したテーマなどを各学芸員が設定し、館所蔵資料及び寄託資料を中心に活用し、一部借用資料も含めて構成した展示を行った。

本稿は、2025年4月1日(火)から2026年3月31日(火)までの間に開催した特集展示の展示記録である(2026年4月1日(水)以降も継続する特集展示は含まない)。展示に用いた「展示概要パネル」「解説パネル」の本文及び出品資料リストと作品解説を記した。

■第1期

会期：2025年4月1日(火)~7月27日(日)

会場：本館2階 展示室2-B

①特集展示「猿投」および特集展示内トピック「祈りのタイムカプセル—猿投窯の経筒外容器」

担当：大西 遼(愛知県陶磁美術館 学芸員)



[展示概要パネル]

愛知県西部に位置する猿投窯は、現在の行政区だと名古屋市、長久手市、日進市、東郷町、豊明市、みよし市、豊田市、刈谷市を中心に約 20 km 四方に広がった大産地です。古墳時代の 5 世紀以降、鎌倉時代の 14 世紀初頭までの約 900 年間操業しました。1080 箇所以上の窯跡が確認され、生産期間、規模とも全国最大規模です。

猿投窯のやきものは、時代とともに移り変わりました。5 世紀から 9 世紀頃までを中心に須恵器を生産し、9 世紀から 11 世紀には緑釉陶器と灰釉陶器を生産、11 世紀末以降は椀や皿などの日用品を主体とする無釉陶器の生産を行いました。

平安時代の 9 世紀は猿投窯の絶頂期であり、国産では当時最高峰の品質を持った緑釉陶器や灰釉陶器が、平安京や各地の寺、役所など、全国各地に流通しました。猿投窯の優れた製陶技術は、12 世紀以降、全国規模でやきもの産地をリードした愛知県西部の常滑窯や瀬戸窯に継承されていきました。

[解説パネル]

トピック：祈りのタイムカプセル—猿投窯の経筒外容器

経筒外容器は筒形で蓋の伴った形をしていますが、経典を地中に保存するためのタイムカプセルです。900 年続く猿投窯でも、主に 11 世紀末から 12 世紀の限られた時期に製作されました。

11～12 世紀、平安時代後半の日本では、釈迦の死後 2 千年後（日本では 1052 年）に「末法の世」をむかえ、釈迦の教えが忘れ去られて世が乱れるという「末法思想」が流行しました。仏教では釈迦の死後 56 億 7 千万年後に弥勒菩薩が第二の釈尊として出現し、生物を救済するとされ、遠い未来に向けて経典を埋めて保存しようという経塚が、貴族層や僧侶を中心に盛んに作られました。現在年代の明らかな最古の経塚として、藤原道長が 1007 年に造営した奈良県の金峰山経塚が知られています。

経典を埋める際、まず金属製の経筒に入れ、さらにやきもの製の経筒外容器に入れて埋納します。腐らず耐久性の高い猿投窯の陶器は、経典を守るタイムカプセルとしての好条件を持っていました。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	須恵器 細頸瓶	猿投窯	古墳時代末期（7 世紀）	A004716
「東へ動く猿投窯の須恵器、独特の造形」 猿投窯の須恵器生産は、5 世紀前半の開窯以降、着実に発展を遂げていきました。既に 5 世紀代には愛知県内だけでなく一部県外でも出土が見られ、6～7 世紀には関東地方にも出土が見られるようになります。本作も群馬県の古墳で出土したと伝わっています。丁寧な仕上げや硬い焼き上がりなど、猿投窯では全国的にも良質な須恵器を生産しました。本作は、理科の実験器具である丸底フラスコに似た形をしていますが、7 世紀の猿投窯で流行した形です。				

	灰釉短頸壺	猿投窯	平安時代前期 (9世紀)	A000888
2	<p>「白と緑、地肌とガラス質のコントラスト」 猿投窯では9世紀に本格的な灰釉陶器が完成し著しく発達しました。左に展示中の8世紀末から9世紀初頭の作例と比べると、本作は地肌が白に近く、灰釉も暗緑色から緑色になり、須恵器とは異なる明るい発色の新たなやきものの完成を伝えています。本作は光沢のない白地に光沢のある緑の灰釉という、質感と色彩のコントラストが目を引きまます。当時もこの新たなやきものに人々の関心が向けられたようで、東海、関東、近畿地方で蔵骨器などに使用されました。</p>			
	灰釉短頸壺	猿投窯	平安時代初期 (8世紀末～9世紀初頭)	A001306
3	<p>「灰釉陶器への試行、上等の骨壺」 8世紀後半の猿投窯では、須恵器の壺などの肩にガラス質の層(灰釉層)を持つ作例が一定量現れます。本作も地肌の部分は褐灰色で、同時期の須恵器と見た目は変わりませんが、肩には暗緑色の灰釉層があります。こうした作例は原始灰釉陶器と呼ばれ、9世紀の本格的な灰釉陶器に発展しました。本作のように口が短く立ち上がる壺は、8世紀末から9世紀にかけて近畿や関東に多く運ばれ、火葬蔵骨器に使用されました。本作も中に人骨が納められて出土しました。</p>			
	緑釉椀	猿投窯	平安時代前期 (9世紀)	一宮市博物館蔵
4	<p>「最高級の国産陶器、緑釉陶器」 9世紀の猿投窯は、本作のように、緑に発色する緑釉をかけた陶器の生産を始めました。緑釉は鉛や銅などの金属原料を的確に調合し、適温で焼く必要があり、先行して緑釉陶器を生産していた平安京周辺から技術導入されました。高度な技術が要求される緑釉陶器の産地は限られており、国産陶器の中で最高級の器でした。緑釉陶器は、当時の天皇や貴族たちの憧れだった、中国・唐の金銀器や青磁・白磁の形を取り入れたものが多く、本作も金銀器の形が元となったものです。</p>			
	灰釉手付瓶	猿投窯	平安時代前期 (9世紀)	A002297
5	<p>「中国のやきものへの憧れ」 猿投窯の緑釉陶器や灰釉陶器には、より高級品として扱われた金属器や中国から輸入されたやきものを写したものがあります。本作は手付瓶と呼ばれる形で、中国・浙江省の越州窯の青磁を祖形にしています。本作は優美な輪郭を描く器形に板状の把手が付けられ、灰白色に焼き締まった地肌に淡い黄緑色の灰釉がかかった、温かみのある色をしています。猿投窯の緑釉陶器や灰釉陶器の手付瓶は、平安京を中心に日本各地で出土し、酒など上等な液体を注ぐのに用いたと考えられます。</p>			
	突帯文四耳壺	猿投窯	平安時代末期 (12世紀)	A001679
6	<p>「猿投窯最後の隆盛」 窯数の拡大や広域流通、緑釉・灰釉陶器生産の確立など、8～9世紀は猿投窯のハイライトにあたる時期です。しかし、約900年で1080箇所の窯が操業した猿投窯で、最後の200年にあたる12～13世紀にも約450箇所もの窯が確認されています。12～13世紀の猿投窯は、椀などの地元向けの日用品を作る一方、本作のような特殊品も焼いています。本作は肩から胴に突帯をめぐらせ、肩に四つの耳を付けたもので、中国産の陶磁器などを模した可能性が考えられます。</p>			
7	棧敷1号窯跡出土品	猿投窯	平安時代前期 (9世紀中葉)	A007414
	匣鉢片(「淳和院」刻書)	猿投窯	平安時代前期 (9世紀中葉)	A007414
8	<p>「上皇の皇太后や親王の居所の器が焼かれた」 本資料群の出土した棧敷1号窯跡は愛知県豊明市にあった窯跡です。「淳和院」の刻書がある匣鉢片がありますが、淳和院とは淳和天皇(786～840)が833年に譲位した後の院御所で、淳和上皇崩御後は皇太后が親王と同居しました。匣鉢は緑釉陶器の素焼きと施釉後の本焼きの際に、燃料の灰や窯の天井からのゴミがつかないように保護するための入れ物です。すなわち淳和院用の緑釉陶器がこの窯で焼かれていたことが分かります。</p>			

9	緑釉陶器素地	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	愛知用水 関連資料
10	青磁碗	中国・越州窯	唐時代 (9 世紀)	寄託作品
11	灰釉碗	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	愛知用水 関連資料
12	青磁四足壺	中国・越州窯	唐時代 (9 世紀)	A006019
13	灰釉四足壺	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	A002304
14	緑釉緑彩三足盤	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	愛知用水 関連資料
15	猿投窯と尾北窯の 緑釉陶器	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	個人蔵及 び愛知用 水関連資 料
		尾北窯		愛知用水 関連資料
16	各地の緑釉陶器	京都府京都市洛北窯	平安時代前期～中期 (9 ～10 世紀)	A001269
		滋賀県近江窯		個人蔵
		岐阜県美濃窯		個人蔵
17	緑釉経筒外容器	猿投窯	平安時代後期 (11 世紀)	A002280
18	三筋文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期 (12 世紀)	A002281
19	三筋文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期 (12 世紀)	A002282
20	牡丹文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期 (11 世紀 末～12 世紀初頭)	A000349
	<p>「祈りを込めたタイムカプセル」 11 世紀から 12 世紀にかけて、仏教が衰退し世の中が大いに乱れるという考えが広がり、人々は仏教の教科書である経典を未来に伝えようとしてきました。当時の貴族や僧侶達は経筒と言う銅製の筒に巻物状の経典を入れ、本作のような外容器に入れて埋めました。猿投窯は 11 世紀末になると釉薬を放棄し、地域の人々の日用雑器を大量に焼くようになりますが、本作のような特別な需要にも対応しました。描かれた牡丹の花は華やかで、当時の貴族や僧侶の好みを反映しています。</p>			
21	三筋文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期 (12 世紀)	A000159
22	三筋文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期 (12 世紀)	A000161
23 24 25	白磁四耳壺	中国 福建省閩江地域	南宋時代 (12 世紀)	A005752
	三筋文四耳壺	猿投窯	平安時代末期 (12 世紀)	A000468
	灰釉四耳壺	瀬戸窯	鎌倉時代 (12 世紀)	A001520
<p>「日本で大人気 国産のモデルとなった中国産」 「国産四耳壺 耳だけでなく三筋も特徴」 「輸入品を国産化」 日宋貿易の拡大で、11～12 世紀に中国産陶磁器の輸入が増加しました。ここに 3 点展示中の内、左側は中国福建省の四耳壺です。四耳壺は肩に四つの耳を持つ壺で、拡大する需要に応えるため、国産の四耳壺が求められました。 3 点展示中の内、中央は猿投窯で製作された四耳壺で、9 世紀を中心に積極的に中国産磁器の形を取り入れた猿投窯が、12 世紀にも同様の課題に取り組んだ様子がうかがえます。3 点展示中の内、右側は瀬戸窯の四耳壺で、13 世紀以降生産を拡大していきました。</p>				

②特集展示「古瀬戸」

担当：大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）



[展示概要パネル]

現在の愛知県瀬戸市域では、平安時代の10世紀から陶器生産が始まり、以後現在まで続く一大やきもの産地に成長しました。瀬戸でのやきもの作りは、先行して国内最大の産地となった、猿投窯の技術が移植されて始まりました。その後、12世紀に至る約200年間、猿投窯とほぼ同様のやきもの作りを行いました。

瀬戸窯の生産が一変したのは、鎌倉時代初期の12世紀末です。当時、猿投窯を中心に9世紀から11世紀に花開いた緑釉陶器・灰釉陶器の生産が廃れ、釉薬を施した国産陶器は消滅といえる状況の中、瀬戸窯は再び釉薬を復活させました。以後、瀬戸窯は鎌倉・室町時代を通して、国内で唯一釉薬を施した陶器の生産を継続しました。

12世紀末から15世紀後半の瀬戸窯の施釉陶器を「古瀬戸」と称していますが、当時より高級な器だった中国の磁器や金属器などの形を積極的に取り入れ、国産最高級の陶器として全国各地に流通しました。

[解説パネル]

古瀬戸中期様式—造形と装飾の極致

鎌倉時代～室町時代後期、12世紀末～15世紀後半の瀬戸窯は、一部の例外を除き全国で唯一の高級施釉陶器の生産を独占しました。この時期の瀬戸窯の施釉陶器が「古瀬戸」ですが、生産内容から大きく前期・中期・後期様式に分けられています。

この内、本特集で取り上げる古瀬戸中期様式は13世紀末から14世紀中頃、鎌倉時代末期から室町時代にかけての時期に相当します。この時期は、器種の多様性、文様の豊富さ、新たな釉薬である鉄釉の導入、茶陶の生産開始等が特徴で、古瀬戸の歴史の中でも内容の最も充実した最盛期と称せる内容を持ちます。造形としては、13世紀後期までの古瀬戸前期様式から続く四耳壺、瓶子・水注に加え、花瓶・香炉等の仏教関連の形、合子や水滴等も加わります。装飾としては古瀬戸前期様式の終りにわずかに登場したスタンプ文様の「印花」、新たに加わる線刻文様の「画花」で大胆に器面を飾ります。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	灰釉木ノ葉文瓶子	瀬戸窯	室町時代（14世紀）	A001809
2	鉄釉巴文瓶子	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A000899
	<p>「二大釉薬・鉄釉、二大装飾法・印花」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中で、灰を原料とする灰釉と並ぶ二大釉薬の一つが鉄釉です。鉄釉は鉄を原料の一つに用いる釉薬で、灰釉に遅れて13世紀末頃に導入され、本作のように茶色や黒に発色します。本作の表面には三つ巴の文様があります。これは木片に文様を刻んだスタンプを表面に押し当てる印花と呼ばれる技法で、画花と並ぶ古瀬戸の二大装飾法です。本作は瓶子と呼ばれる中国の磁器に由来する酒器用の形です。</p>			
3	灰釉鉄流し瓶子	瀬戸窯	室町時代（15世紀）	A000406
	<p>「漆器写しの酒器、二大釉薬の合わせ技」 古瀬戸の中で、本作のように肩が張り小さな口を持つ瓶子は、約300年間作られた代表的な形です。12世紀末から14世紀前半の瓶子は、左に展示している2点のように梅瓶と呼ばれる中国の磁器を祖形とした形です。対して本作は、根来塗りの漆器の瓶子を祖形とする新たな形式の瓶子で、14世紀後半から登場します。古瀬戸の釉薬には灰釉と鉄釉があり、どちらか一方を施すことが圧倒的に多いですが、本作のように灰釉を基本にしつつ鉄釉を流し掛ける作例もあります。</p>			
4	灰釉牡丹文瓶子	瀬戸窯	室町時代（14世紀末～15世紀初頭）	個人蔵
5	灰釉水注	瀬戸窯	鎌倉時代（13世紀）	寄託作品
	<p>「金属器がモデル、古瀬戸前期はシンプル」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中には、金属器がモデルの形もあります。本作のような注口の基部に菊花のように刻み目が付けられ、底に高台を持ち、口が受口状になる水注は、僧侶が心身を清めるため手を洗う際に用いる金属器が当初のモデルです。多くの古瀬戸製品では、12世紀末～13世紀半ば頃まで、本作のように文様を積極的に施すことはありません。その後13世紀末～14世紀前半を中心に文様を積極的に施すようになりました。</p>			
6	鉄釉印花文環耳花瓶	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A001225
	<p>「仏教用の花瓶、金属器や中国産磁器を模倣して」 12世紀の平安時代末頃から、地元で使う椀・皿などの食器の他に、産地によっては大量生産・広域流通する「壺・甕・鉢」という中世のやきものを象徴する3種セットが生まれました。猿投窯から伝播した常滑窯でもこの3種セットが作られ、本作は壺にあたります。肩から胴に三段の横線を持つ三筋壺で、12世紀の常滑窯の代表的な壺です。この三段の横線は、仏教思想、木製品の形、中国のやきものの文様、金属器の形など、何を表したのか様々な案が出ています。</p>			
7	灰釉魚文四耳壺	瀬戸窯	室町時代（14世紀）	A000743
8	灰釉草花文四耳壺	瀬戸窯	鎌倉時代（13世紀）	A001762
	<p>「元は中国産がモデル、装飾はアレンジ」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中には、中国の磁器がモデルの形が多くあります。本作のように肩に四つの耳を付けた四耳壺も代表例の一つで、中国福建省の白磁の四耳壺が当初のモデルですが、徐々に日本風のアレンジされました。本作の日本風のアレンジとして最たるものが、花唐草の文様で肩の部分が飾られていることです。文様はスタンプを押す印花の技法で施されていますが、中国産の白磁四耳壺に印花が施されることはありません。</p>			
9	灰釉菊花文瓶子	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A000689
10	灰釉魚文盤	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A001654

11	灰釉草葉文瓶子	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A001014
12	灰釉貼花波文合子	瀬戸窯	鎌倉時代末期（14世紀前葉）	A007536
13	萱刈窯跡出土品	瀬戸窯	鎌倉時代末期（14世紀前葉）	A007586
14	灰釉印花文水注 鉄釉印花文水注	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A001739
15	鉄釉印花文環耳花瓶	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A001613
16	鉄釉印花文環耳花瓶 香炉 燭台	瀬戸窯 瀬戸窯 瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀） 鎌倉時代（14世紀） 鎌倉時代（14世紀）	A001655 A002661 A001842

③特集展示「名古屋のやきもの ―豊楽焼・笹島焼・藩士たちのやきもの編―

担当：佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



[展示概要パネル]

愛知県には、瀬戸と常滑という2大陶産地がありますが、実は江戸時代の名古屋市内とその周辺でも、さかんにやきものが焼かれていました。

尾張藩の御庭焼であった御深井焼をはじめ、楽焼系の窯や、藩士や医師、商人らが余技として手掛けるものもありました。他の産地でもこうした現象は見られるものですが、名古屋が他と異なっていたのは、窯業以外の技術も発展した都市文化圏であったことや、瀬戸・常滑という大陶産地が身近にあったことで、楽焼系でも非常に個性的な装飾技術を得ていたり、藩士たちの余技と言っても本格的に焼き上げられた陶器であったりしたことです。今回の特集展示では、名古屋のやきものうち、豊楽焼、笹島焼、藩士たちによる個性豊かなやきものを紹介します。

[章パネル]

名古屋のやきもの特徴 1. 他産地にはない個性！

江戸時代中～後期は、日本各地の城下に低下度焼成の楽焼系の窯が築かれてきましたが、名

古屋では他には見られない個性豊かなやきものが焼かれました。

今回は、その中でも「豊楽焼」と「笹島焼」を紹介します。

豊楽焼は、尾張藩十二代藩主徳川斉荘より「豊楽」の額を賜ったとされ、18世紀末から20世紀初頭まで操業しました。緑釉を効果的に用いた作品のほか、本来は絵画に使用する岩絵具を用いたり、陶器の上に漆の蒔絵を施すなど、非常に個性的な装飾技法にも挑戦していました。

笹島焼は、牧朴斎（1782-1857）が創始し、大正後期頃まで続いた窯で、現在の中村区名駅のあたりに所在していました。鮮やかな色彩で描かれた文様や土型をもちいた造形で人気を集めました。

名古屋のやきものの特徴2. 余技なのに本格的！

茶どころとして知られる西尾を身近に持つ江戸時代の名古屋は、茶の湯が盛んな都市文化圏であり、陶工ではない人々（藩士、医師、商人ら）も陶芸に親しむ土壌が育っていました。

そこに、大窯業地である瀬戸・常滑の技術が加わり、余技であっても本格的な窯で焼いた陶器が誕生したのです。これが、他の地域には見られない名古屋のやきもののもう1つの特徴です。

今回は、とくに秀でた才能を発揮した、尾張藩士の平澤九朗、正木惣三郎・伊織、市江鳳造の作品を紹介します。彼らは、茶の湯の指導をする立場にあった茶人というよりは、日常的に作陶と茶の湯を楽しみ、趣味が高じて本格的な域まで達した人々であると捉えられます。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	岩絵具加彩秋草図蓋物	豊楽焼	安政6年（1859）頃	A007411
	「風に揺れる秋草が美しい」 豊楽焼の三代豊介は、織部、赤絵、染付、御深井などを得意としただけでなく、独自の加飾方法を意欲的に開発しました。本作は、素焼に岩絵具で加彩した陶器です。蓋物となっており、内部は豊楽焼において典型的な緑釉を流し掛けた意匠です。表面は、焼き付けていない岩絵具の鮮やかな色を活かし、色とりどりの花をつけた秋草を描いています。三代豊介が数え年81歳の時に制作したことが分かる刻銘が入っています。（底面に「八十一翁」刻銘、「豊楽」円印）			
2	岩絵具加彩撫子文瓶掛	豊楽焼 画：近藤芙山	弘化2年（1845）頃	寄託作品
	「まるで絵画のような華麗な器」 本作も、素焼に岩絵具で加彩した陶器です。絵の具を焼き付けていないため、表面はもろいのですが、絵の具の鮮やかな発色そのまま生かされ、まるで一幅の絵画のようです。画は、絵師として活躍した近藤芙山が施しました。（底面に「乙巳秋 芙山製（花押）」、「豊助」印）			

	鉄絵雪月花図五角三組鉢	豊楽焼	江戸時代後期～明治時代初期 (19世紀前半)	A007410
3	<p>「雪・月・花の三組鉢」 三組鉢の形態をとった鉄絵の鉢です。タタラづくりの板を組み合わせた複雑な器形を、正確に入れ子になるよう成型しており、高い技術とデザイン力が見て取れます。器の見込には京焼の錆絵風の雪月花の絵付けを施しており、おおらかさを意識した筆致ながら白化粧土の発色も良く、静寂な雰囲気演出しています。(底面に「豊助」角印)</p>			
	寿老人香合	豊楽焼	江戸時代後期 (19世紀)	寄託作品
4	<p>「いまの大須で焼かれました」 扇の上に乗りに、大きなひょうたんに腰掛けて微笑む寿老人をかたどった香合です。底部に「香久連里」と刻まれており、これは現在の名古屋市中区大須(旧・前津)に在った万松寺南の隠郷(香久連里)のことを指しています。(底面に「香久連里／豊助造」刻銘)</p>			
	交趾写鶴鴿香合	豊楽焼	嘉永5年(1852)頃	寄託作品
5	<p>「上様御好」の箱書きあり 小さく愛らしいセキレイをかたどった香合です。共箱の蓋裏に「七十三翁／大喜豊介之造」とあることから、三代豊介が73歳の頃に作ったと把握できます。そして、箱の蓋表には「上様御好」の墨書もあり、特定はできませんが、尾張藩十二代藩主徳川斉荘あるいはそれ以降の藩主の好みでもあったことが推測されます。(底面に「豊助」印)</p>			
	菖蒲文四方鉢	笹島焼	江戸時代後期(19世紀前半)	A000130
6	<p>「絵を得意とした牧朴斎」 笹島焼を創始した牧朴斎は、江戸時代後期、名古屋城下で人気を博した画家・張月樵(ちょうげっしょう、1764-1832)に絵を学び、また彫刻も得意としたとされます。本作は、四方鉢を額面のように使い、菖蒲の花を深く一輪だけ描いています。菖蒲の葉には葉脈が細かく入るなど、丁寧に写実的な描写に朴斎の腕が発揮されています。(底面に「篠嶋」印)</p>			
7	摩竭文四方鉢	笹島焼	江戸時代後期(19世紀前半)	A004642
	底面に「笹嶋」瓢印			
8	都鳥香合	笹島焼	江戸時代後期(19世紀前半)	寄託作品
	蓋裏に「笹嶋」印			
	河豚鉢	笹島焼	江戸時代後期(19世紀前半)	寄託作品
9	<p>「遊び心と教養あふれる笹島焼」 笹島焼は、大量生産ではなく、趣味性の高いやきものを作る窯でした。ここで紹介している河豚や椎茸などをそのまま表した遊び心あふれる造形のほか、想像上の大魚「摩竭」をモチーフとするなど、教養人たちに応えるような器を生み出していました。(外側面「ふぐはどく すましてよめば ふくはどく」鉄絵銘)</p>			
10	椎茸鉢	笹島焼	江戸時代後期(19世紀前半)	寄託作品
	底面に「笹嶋」印			
	仙境図大鉢	笹島焼	江戸時代後期(19世紀前半)	寄託作品
11	<p>「遊び心と教養あふれる笹島焼」 笹島焼は、大量生産ではなく、趣味性の高いやきものを作る窯でした。こちらは、明時代中国の仙境図大鉢を写したものです。江戸時代中～後期の中国文人趣味に応えた制作と考えられますが、本家以上に緻密に文様が描き込まれており、高い教養が備わっていたと思われます。</p>			

	織部松皮菱形手鉢	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	A007213
12	<p>「九朗のセンスが光る織部」 松皮菱を器形に大胆に取り入れた手鉢です。大きく切り込まれた窓と線刻の入る把手も装飾性が強いものの、全体がバランスよく整えられた造形です。 桃山時代の織部を彷彿させる素早くも加減を考えられた筆運びによる鉄絵、濃い発色の緑釉の用い方も破綻がなく、かつ華やかさを演出しています。（底面に「く」刻銘）</p>			
	織部松皮菱形手鉢	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	A007213
13	<p>九朗のセンスが光る織部 松皮菱を器形に大胆に取り入れた手鉢です。大きく切り込まれた窓と線刻の入る把手も装飾性が強いものの、全体がバランスよく整えられた造形です。 桃山時代の織部を彷彿させる素早くも加減を考えられた筆運びによる鉄絵、濃い発色の緑釉の用い方も破綻がなく、かつ華やかさを演出しています。（底面に「く」刻銘）</p>			
14	黒織部茶碗	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	A000104
	「く」「口百」刻銘			
15	赤織部深向付	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	寄託作品
	底面「く」刻銘			
16	黄瀬戸千切水指	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	寄託作品
	底面「く」刻銘			
	志野茶碗	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	A000112
17	<p>「句も合わせると…その1」 作陶を楽しんだ九朗は、箱書に自作の句を添えることがありました。九朗は志野も得意としており、本作の箱書には「はきためも模様になるや雪こかし 六十六翁九朗（印）」とあり、志野釉を雪に例えています。自身の鉄絵を“掃き溜め”と表しつつも、それをうまくまとめ上げる志野釉を讃しているようです。（底面に「く」「朗（花押）」刻銘）</p>			
	鉄釉茄子手付花入	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	A000116
18	<p>「句も合わせると…その2」 本作の箱書には「松風の里にむれゐる まな鶴乃 千と勢かさぬる 心地こそすれ 同所の土を以て造之 六十八翁九朗（印）」とあります。ここに表される「松風の里」が名古屋のどのあたりだったのかは不明ですが、良土が産出する場所だったと考えられます。何度も試作を繰り返す自分自身を群鶴に重ねた句です。（底面に「九朗（花押）」他刻銘）</p>			
	褐釉狸手焙	平澤九朗（初代）	江戸時代後期（19世紀前半）	寄託作品
19	<p>「句も合わせると…その3」 ぽってりと丸くうずくまった狸をかたどった手焙です。手焙は、中に灰を入れてその上に炭を置き、体のそばに置いて暖をとる暖房器具です。本作の底面には「底面「雪の夜は腹鼓うて古狸 九朗造併句」刻銘」とあります。冷え込む冬の夜、心がほっとするような情景が思い浮かびます。（底面に「九朗造」他刻銘）</p>			
20	福俵黒茶碗	正木惣三郎・正木伊織	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
	志野茶碗	正木惣三郎・正木伊織	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
21	<p>「尊敬する茶人の茶碗を写して」 尾張藩士の中でも、とくに茶の湯に親しみ茶人として名を馳せる人物もいました。こちらの茶碗は、胴部に「大観廬の作を写す」という意味の文字が入っており、尾張藩士で漢学者、茶人としても知られた千村伯就（1727-1790）の作を写しています。</p>			

	寿老人香合	正木惣三郎・正木伊織	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
22	「丁寧に作られた滋味深い香合」 小型の茶器を得意とした正木惣三郎・伊織の本領が発揮された、小さな蓋置や香合を集めました。 特に細かく作り込まれた人物の造形からは、余技としての作陶を超えた技量が感じられますが、同時に作陶を心から楽しんでいた様子もうかがえます。			
23	御深井鯨香合	正木惣三郎・正木伊織	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
24	黄瀬戸福祿寿香合	正木惣三郎・正木伊織	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
25	雪遊び蓋置	正木惣三郎・正木伊織	江戸時代後期（19世紀）	A002482
	御深井中蕪花入	市江鳳造（伝）	江戸時代後期（19世紀）	A000119
27	「中国の青磁に倣った形と色」 「中蕪花入」とは、青銅器の尊に倣った形で、胴部中央に膨らみがあるため日本ではこのように呼ばれます。中国においては、南宋～元時代にかけて青磁で優品が焼かれました。本作は、こうした青磁の中蕪花入を写したもので、胴部の細かで立体的な装飾や、全体に掛けられた青みがかかった御深井釉が気品ある表情を見せています。			
	志野茶碗	市江鳳造	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
28	高台脇「香実翁年賀代作試二造之 七十九翁梨棗」 疊付「香実」瓢印銘、胴部「七十翁（花押）」書銘			
29	志野茶碗	市江鳳造	江戸時代後期（19世紀）	A000096

③特集展示「UTSUWANIMAL 器になった動物たち」

担当：田畑 潤（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）

佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



[展示概要パネル]

人々は古代から身近にいた動物たちを土でかたどってきました。トーテムとして信仰していたもの、家畜として飼っていたもの、愛玩していたものなど、動物に対する想いや当時の自然環境が思い起こされます。

デフォルメ化したものからリアルな造形まで、やきものの技術と芸術の発展が見られるほか、生活や儀式に用いられる器になった動物たちも見られます。

この展示では、古今東西・あらゆる時代、様々な器になった動物形のやきものを紹介します。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料 登録番号
1	赤色土器鹿形リュトン	イラン	紀元前 1200～紀元前 1000 年頃	A002162
	<p>「口からお酒を出すんです」 リュトンとは、動物の頭部などを模した注器で、角杯のものや動物形のものもみられます。古代オリエントで発祥し、古代ギリシア、古代ローマ、ペルシアなど、広範囲な地域でみられ、神々への捧げ物や、神聖な飲み物を飲むために用いられたと考えられています。神聖視された動物があらわされ、権力や富の象徴としての器物でもありました。</p>			
2	羊頭装飾壺形リュトン	イラン・アゼルバイジャン	紀元前 1000 年頃	A005782
	「ヒツジ? ヤギ? ウシ?」			
3	彩陶牡牛形リュトン	イラン	紀元前 1000 年頃	A005058
	「酒注ぐリュトン、牛飲注意!」			
4 5	褐釉象形壺	カンボジア・クメール窯	12～13 世紀	A005032 A005033
	<p>「クメールの象は貴族の乗り物」 クメール陶磁の象は、球形の壺の形を活かすためか、鼻も尻尾もゆるく下がっています。象の頭部には装飾が施され、壺の口の周囲には人が乗るための鞍が付けられています。この種の壺の中に石灰が残っていることが多く、古くから嗜好品として東南アジアで広くたしなまれてきたキンマ噛みに関連した容器と考えられます。</p>			
6	彩陶豹型把手付碗	ペルー、チャンカイ	12～14 世紀	A005042
	<p>「深淵を覗く時、深淵もまたこちらを覗いているのだ」 ペルー中部海岸のチャンカイ文化の土器は、人や動物を象った装飾が付いた器がみられ、ユーモラスな表情をしているのが特徴です。本作品は、把手部分がジャガーの顔になった碗で、何かを訴えているかのような眼をしています。NHK「キュレーターバトル」 #イチ推し生きものに推薦した作品です。</p>			
7	彩文アルマジロ形壺	パナマ中央部	14 世紀以前	A006120
	「上げているのは後脚? 尻尾?」			
8	加彩馬俑	中国	前漢時代 (紀元前 2 世紀)	A002625
	<p>「あの世で駆ける黒馬」 灰色の素地の上に褐色の化粧土を掛けて焼成した馬で、口の中が白く、鼻の穴が赤く彩色されているのがわずかに残っています。漢時代に理想とされた四角い体つきをした馬の姿が、筋肉の細部まで丁寧に表現されています。始皇帝の兵馬俑に比べるとミニチュア化されていますが、副葬用の明器として大量生産されました。</p>			
9	唐三彩馬	中国	唐時代 (8 世紀)	寄託作品
	「荘厳な白馬」			

10	瘤牛形容器	伝 パキスタン・メヘルガル遺跡出土	先インダス文明期・ナール式 (紀元前 3500-紀元前 2600 年頃)	A006889-000306
	<p>「器になったコブウシ」 本作品は、インダス文明よりも古い段階の彩文土器で、バローチスターン地方のナール文化に属します。瘤牛の頭の上に大きな鉢形の器が付き、中に液体が入るようになっています。造形はややリアルで陰囊の表現から雄牛とわかりますが、文様は抽象的に表現されています。</p>			
11	青磁褐彩蛙形水盂	中国・越州窯	西晋時代 (3~4 世紀)	A005042
	<p>「思うに水盂の中から、一滴の水をカエルの背に落したるを」 水盂とは、硯にさすための水を入れる器です。平たい壺形の胴部に、蛙の頭と手足、立体的な花が表され、表面全体には印花 (スタンプ) による花模様が見られます。口の部分とカエルの目は、褐色に色づけされています。キャッチコピーは、夏目漱石『草枕』の一節をもじったものです。</p>			
12	蕪に鶉香炉	日本・備前窯	江戸時代後期 (19 世紀)	A000258
	<p>「縁起の良いことわざから？」 備前窯は、焼締による力強い作風が特徴ですが、江戸時代になると焼成後の素地に胡粉などで地塗をした上に岩絵具で彩色した「彩色備前」と呼ばれる新たな装飾の製品を生産します。本作は、蕪と 2 羽の鶉を表した香炉であり、驚くべき写実的な表現となっています。なお、蕪と鶉の組み合わせは、「蕪は鶉となり、山芋は鰻となる」という、身分の低い人が急に出世や金持ちになる、ということわざから来ているのかもしれませんが。</p>			
13	象香炉	日本・瀬戸・加藤善治 (初代)	江戸時代後期 (天保 7 年 : 1836)	A003268
	<p>「象は昔から人気者」 象の形をかたどった香炉です。象の上には蓮の形をした「蓮華座」が乗っていることから、白い象に乗っているとされる普賢菩薩を示唆しています。瀬戸の白く、細かな造形を可能にする土の特性を最大限に活かしています。象は、江戸時代中頃、徳川吉宗の治世にベトナムから来日し、大変な象ブームを巻き起こしたことで知られています。(底部・蓋裏「天保七丙申年 尾州背戸村竈屋 早梅亭善右エ門 百之内作之」刻銘)</p>			
14	象香炉	日本・瀬戸・加藤善治 (初代)	江戸時代後期 (天保 7 年 : 1836)	A003268
	<p>「象は昔から人気者」 象の形をかたどった香炉です。象の上には蓮の形をした「蓮華座」が乗っていることから、白い象に乗っているとされる普賢菩薩を示唆しています。瀬戸の白く、細かな造形を可能にする土の特性を最大限に活かしています。象は、江戸時代中頃、徳川吉宗の治世にベトナムから来日し、大変な象ブームを巻き起こしたことで知られています。(底部・蓋裏「天保七丙申年 尾州背戸村竈屋 早梅亭善右エ門 百之内作之」刻銘)</p>			
15	鉄釉牛手焙	日本・瀬戸・加藤春宇	江戸時代後期 (19 世紀)	寄託作品
	<p>「牛の毛並みまで見事に表現」 手焙とは、中に灰を入れてその上に炭を置き、体のそばに置いて暖をとる暖房器具です。熱に耐え、丈夫な陶器製が多く作られました。機能だけを考えれば、特に動物の形である必要はないのですが、本作品のように動物の形をしたものが多く見られます。優れた造形と細かな毛並みの表現により、どこか気品漂う逸品となっています。</p>			

	色絵獅子置物	日本・有田・柿右衛門窯	江戸時代中期（18世紀）	A001617
16	<p>「ヨーロッパに、東洋の風を届ける！」</p> <p>色とりどりの色絵を施された、表情豊かな唐獅子の置物です。有田の柿右衛門窯では、染付を伴わないことで実現した温かみのある乳白色の素地「濁し手」に、色絵を合わせた柿右衛門様式の製品が焼かれました。皿や壺の優品が知られていますが、本作のように東洋的な雰囲気をもった置物も、輸出先の西洋で人気を集めました。</p>			

④特集展示「芙蓉手にあこがれて」

担当：佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）

田畑 潤（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



[解説パネル]

芙蓉手とは① 中国・景德鎮生まれのやきもの。名前の由来はその見た目から

芙蓉手とは、中国・景德鎮で16世紀末～17世紀前半に作られた、中央に花池や水禽、花盆などを描き、その周りに放射状に8つ程度の花卉を配した青花を指します。日本においては、これを芙蓉の花に見立てて「芙蓉手」と呼ぶようになりました。

芙蓉手とは② ヨーロッパで大ヒット！世界各地で写しが作られる

芙蓉手は、特にヨーロッパ市場で好まれたため、景德鎮以外の福建省の窯や、日本の有田窯、さらには磁器を生産できないオランダや中近東でも生産されました。とくに伊万里では、東インド会社からの発注を受け、色絵も合わせて新たな要素の加わった芙蓉手を生産しました。

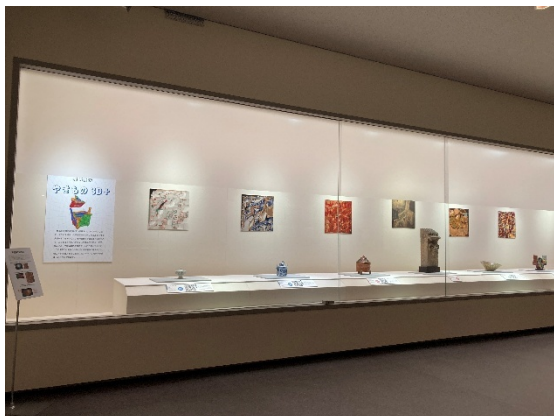
[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	青花芙蓉手盤	中国・景德鎮窯	明時代 (16～17 世紀)	A002668
	<p>「世界の人々の憧れ」 鮮やかな白と青が目を惹く大皿です。見込みには花籠文が描かれ、春の牡丹と秋の菊の花が生けられています。芙蓉手は、もともと明の万暦年間 (1573～1620 年) に民窯で登場した新しい様式とされますが、広い器面を効率よく文様で埋めていくために開発された画期的な発明なのかもしれません。</p>			
2	青花蓮池水禽文盤	中国・漳州窯	明時代後期 (17 世紀前半)	A002774
	<p>「芙蓉手は中国内でも模倣された」 漳州窯は、中国福建省漳州地区の窯です。明時代後期から清時代前期には、「芙蓉手」が生まれた景德鎮窯の製品を模した輸出用のやきものを多く生産しました。特に青花 (染付) のものは、「呉州染付」と呼ばれています。景德鎮窯の製品と比較すると、素地の色や呉須の発色ににごりが認められます。</p>			
3	染付芙蓉手花籠文大皿	日本・有田窯	江戸時代中期 (18 世紀)	A000213
	<p>「景德鎮窯に劣らぬ品質」 景德鎮窯の芙蓉手を写した皿です。有田窯では、中国の明末清初 (17 世紀前後) の混乱の影響で景德鎮窯の輸出量が落ちたため、その代わりとなり多くの輸出用磁器を焼きました。本作は、素地にゆがみはほとんど見られず、また染付の発色も良好です。文様は全体に安定した精緻な構成となっています。</p>			
4	染付芙蓉手 VOC 大皿	日本・有田窯	江戸時代中期 (18 世紀)	A002259
	<p>「アルファベットの社名入り」 本作も、芙蓉手を写した有田窯の製品です。本作が通常の芙蓉手と異なるのは、見込に「V・O・C」の頭文字があらわされていること。これは、「オランダ連合東インド会社」の略称であり、同社の注文による製品であると考えられます。</p>			
5	色絵芙蓉手花文皿	日本・有田窯	江戸時代前期 (17 世紀)	A002258
	<p>「珍しい、色絵の芙蓉手」 景德鎮窯の芙蓉手を写した皿ですが、通常は染付のみである芙蓉手に色絵を加えています。さらなる付加価値を狙っての装飾だったことが推測されますが、色絵の具で彩色したあと、さらにもう一度焼成する必要があることから、染付のみの芙蓉手に比べて非常に数は少ないものです。</p>			
6	白地藍彩芙蓉手盤	イラン	17 世紀～18 世紀	A002450
	<p>「磁器ではないけれど・・・その 1」 景德鎮窯の芙蓉手を写した皿は、中東でも生産されました。本作は、青花磁器と同じく白色の胎土の上にコバルト顔料で絵付けをし、透明釉をかけて焼いたものですが、焼成温度は低く、軟質陶器に分類されます。</p>			
7	白地藍彩花鳥文盤	イラン	17 世紀～18 世紀	A005210
8	藍絵芙蓉手花鳥文盤	オランダ・デルフト窯	17 世紀後半	A005211
	<p>「磁器ではないけれど・・・その 2」 景德鎮窯の芙蓉手を写した皿は、輸出を仲介していたオランダ東インド会社のお膝元、オランダ国内でも生産されました。本作は、縁の釉薬が欠損している箇所をよく見ると、本来の茶色い土の色が見えます。素焼きした器に、錫と鉛を含む白い釉薬をかけ、コバルト顔料で絵付けをし、透明な釉薬を掛けて仕上げられています。</p>			
9	藍絵芙蓉手人物図盤	オランダ・デルフト窯	17 世紀後半	A002666

⑤特集展示「やきもの3D+」

担当：田畑 潤（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）

佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



〔展示概要パネル①〕

品の背景に展示している画像は、3D スキャンしたデータから生成された平面データです。作品をあらゆる角度からスキャンして、その座標を平面に落としたもので、よく見るとバラバラになった作品だとわかります。作品によっては抽象的な現代アートにも見えてきます。この展示では実物の作品とその平面画像の鑑賞のほか、QR コードを読み取ることによって、3D スキャンしたデータを楽しむことができます。

〔展示概要パネル②〕

不思議な絵は何？

このコーナーには、作品の背景に不思議な絵のようなパネルがあります。これは、3D スキャンしたデータから生成された平面データ…つまりあらゆる角度から見た器の表面の「文様」を1枚の絵にしたもの。3D スキャンした器の「形」のほうには座標が与えられません。その座標に合わせて、表面の文様を平面データから読み込み貼り付けています。

データを再生するときは、「形」に座標が振られて、この文様はここ、この文様はここへ…というふうに座標に合わせて貼り付けられます。「形」と「文様」が合体しました！

〔出品作品および解説〕

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	色絵草花文香炉	有田窯	江戸時代中期（18世紀）	A002243
	<p>「西洋で大人気！」 江戸時代中頃に、現在の佐賀県西松浦郡有田町の有田窯で焼かれた、柿右衛門様式の香炉です。柿右衛門様式とは、江戸時代の延宝(1674～81)頃をピークとする輸出向けの色絵製品で、余白をゆったりと残した優美な絵付けの作品が多くあります。本作は、小さな獅子が摘みとなった香炉ですが、実際に輸出先となったヨーロッパではどのように使われたかはわかりません。</p>			

	染付窓抜山水文香炉	男山焼	江戸時代後期 (19世紀)	A001248
2	<p>「紀州藩のお膝元」 江戸時代後期に、現在の和歌山県で焼かれた南紀男山焼の香炉です。南紀男山焼は、江戸時代の文政10年(1827)に当時の紀州藩の全面的な支援のもとに崎山利兵衛という人物が窯を開いたとされ、明治11年(1878)まで操業しました。本作は、全体的に丁寧に整形された上質の磁器で、中国の祥瑞などをイメージした染付が施されています。</p>			
	緑褐釉温酒尊	中国	前漢時代後期 (紀元前1世紀頃)	A002487
3	<p>「神仙世界へ誘う酒壺」 緑や褐色を表現する「鉛釉陶」は、漢時代のやきものに豊かな色彩を与えました。本作品は副葬用の明器で、胴部側面のレリーフや蓋の山の造形は神仙世界を表現していると考えられています。足は子供を抱いた熊の形に作られています。熊は邪気を祓う「辟邪」としての役割や信仰の対象とされ、漢時代には器物の足のデザインとして盛んに用いられました。</p>			
	緑釉生命樹	中国	後漢時代 (1~2世紀)	A004298
4	<p>「木にとまる一匹の〇〇」 生き生きとした水性生物や動物たちがたわむれる円形の池の中央に大樹が伸びている造形物で、建築明器の一種です。中央の大樹には鳥たちがとまり、弩(ど・いしゆみ)を構えた人物にねらわれています。また、大樹の幹には死者再生の象徴でもあるセミが一匹とまっています。</p>			
5	羊頭中空画像磚	中国	漢時代 (紀元前2世紀~紀元後2世紀)	A004336
	<p>「羊の皮をかぶった家壁」</p>			
	黄地多彩鳥文鉢	イラン・ニシャプール	9~10世紀	A002496
6	<p>「頭飾りが異なる一羽の鳥を探して」 9から11世紀頃、イラン東北部のホラーサーンや中央アジアのトランスオクシアナ地方で、紅い素地に白化粧土をかけた上にさまざまな色の顔料や釉を使って文様を描いた彩画陶器が作られました。本作品は黄釉をベースに鳥やハート文様がユーモラスに描かれており、日本にあるイランの彩画陶器の中でも優品の一つとして知られています。</p>			
7	金彩花文花器	エミール・ガレ ラオン=レタップ製陶所	1877-1884年頃	A005807
	<p>「三つの三日月」</p>			

⑥特集展示「茶器濟濟」

担当：田畑 潤（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



〔展示概要バナー〕

「茶器濟濟」とは、中国最古の詩集『詩経』大雅・文王の「多士濟濟」になぞらえた造語です。「濟濟たる多士、文王以て寧んぜり（中国古代、周の名君である文王のもとに、数多くの優れた人材が集まり、心安らかであった。）」という詩句から、すぐれた人物が大勢いることを表す四字熟語となりました。

「茶器濟濟」とは、茶の湯と煎茶の二つの茶道の道具が集うことをあらわしています。

〔解説パネル〕

茶の湯

茶の文化は古来、中国から禅僧儀礼として日本へもたらされました。茶の湯は戦国時代末期に大きく発展、やがて千利休によって大成されたと言われます。

亭主と客が茶室で過ごす非日常なひとときを、茶事と言います。その茶事を彩る茶道具は、用途毎に分けても実に四十種類以上もあります。季節やテーマによって趣向を凝らし選ばれる道具の中には竹、漆、金属など様々な素材があります。それらの中でも特にやきものを中心に取り上げ紹介します。

煎茶

煎茶とは、中国明時代に主流となった喫茶方法が日本に伝わったものです。沸騰した湯に茶葉を「煎じる」、茶葉に湯をかけ「淹れる」方法で、茶銚（急須・茶注）を用い、小さな茗碗で茶を喫します。

煎茶道具は唐物（中国茶器）が好まれ、多くの写し物が作られました。道具組は、素朴なものから色彩豊かなものなど多種多様で、中国への憧憬を形にした日本独自の文人趣味・煎茶文化として発展してきました。

[出品作品および解説]

組/NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料 登録番号	
茶 の 湯	1	肩衝茶入	瀬戸窯	江戸時代前期 (17世紀)	A001537
	2	志野塔松樹文茶碗	美濃窯	安土桃山時代 (17世紀初)	寄託作品
	3	鬼桶水指	信楽窯	安土桃山時代 (16世紀)	A000248
4	黒織部茶碗	美濃窯	安土桃山時代 (16~17世紀初頭)	A002487	
	<p>「モノトーン抽象絵画茶碗」 黒織部は鉄釉を掛けた器物を焼成中に窯内から引き出して急冷させ、漆黒色に発色させた陶器です。鉄釉を一部掛け残し、その部分に鉄絵を描いて長石釉を施したり、鉄釉部分に掻き落しの文様を施したりしています。本作品の様な黒織部は、江戸時代初期に唐津（佐賀県）から導入された「連房式登窯」と呼ばれる形式の窯で焼かれたものです。</p>				
5	黒茶碗 銘美男	樂左入/樂吉左衛門 (六代)	1733年	寄託作品	
	<p>「手になじむ手づくね」 樂家は安土桃山時代の茶人、千利休の創意を受けて茶碗を制作した長次郎を祖とする陶家です。樂茶碗は粘土の板を手で立ち上げて成形され、これを「手づくね」と言います。こちらは樂家の六代目左入によるもので、「二百之内」の箱書きから左入が制作した二百碗の連作のひとつと考えられます。</p>				
6	建盞（兎毫盞・禾目天目）	中国・建窯	南宋時代 (12~13世紀)	A002752	
	<p>「ウサギの毛か、稲穂の先か」 江南地域の建窯で生まれた盞（碗）は茶を飲むのに最適な器として、日本でも「天目」という名で珍重されました。中国の天目山の禅寺から、留学僧がこの種の器を持ち帰ったことに由来します。本作は、線状の文様がウサギの毛のようなので、「兎毫盞」とよばれます。日本では稲穂の先（禾）をとらえ、このような茶碗を「禾目天目」ともいいます。</p>				
7	青磁蓮弁文碗	中国・龍泉窯	南宋~元時代(13世紀)	A003155	
	<p>「日本で流行した茶陶の碗」 胴の部分に、細長い蓮の花びらを浮き彫りで流れるように表しています。日本で好まれた粉青色の「砧青磁」の語源は、この色の名品が布を打つ道具の砧（きぬた）の形に似ているから、また、千利休が自分の青磁のひびわれの風情に砧を打つ音のひびきをかけて、その青磁を「砧」とよんだから、と言われていいます。</p>				
8	粉青沙器刷毛目碗 銘「猿沢の池」	韓国	朝鮮時代 (16世紀)	A004926	
	<p>「刷毛が生み出す自然な美」 口がわずかに外反するやや大ぶりの碗で、焼成前の器の上半と内面に刷毛で白化粧土をざっくりと塗っています。刷毛で塗ることで白化粧土にかすれや濃淡が生じ、また刷毛塗りが施されていない素地の部分の灰色とのコントラストが特徴になっています。この種の高麗茶碗を日本では「刷毛目」と呼んでいます。</p>				

9	粉青無地刷毛目碗 銘「稻妻」	韓国	朝鮮時代（16世紀後半）	A004253	
	<p>「雨漏りを愛でる」 本作品は、口が外傾するやや小ぶりの碗で、底部を除く全面に白化粧土がかけられていることから無地刷毛目に分類されます。ところどころ釉の下に液体が染み込んで出来た雨漏りがあらわれています。高麗茶碗の中でこの種のことを雨漏手と呼んで、その景色を茶碗の見どころとしています。</p>				
煎茶	10	朱泥茶鉢	中国・宜興窯	清時代末期（19世紀）	A004090
	11	青花山羊文茗碗	景德鎮窯	清時代後期（18世紀）	A004089
	12	錫花鳥文托子 乾隆年製 款	日本または中国	江戸時代または清時代 （18～19世紀）	研究資料
	13	白泥涼炉	京都	江戸時代末期～明治時代 （19世紀）	A004073
	14	白泥湯罐	京都	江戸時代後期（19世紀）	A004072
	15	青花唐子文茶心壺	中国・景德鎮窯	清時代末期（19世紀）	A003217
	16	黒釉有蓋水注	中国・磁州窯系	明～清時代（16～17世紀）	A002766
17	五彩花文杯	中国・景德鎮窯	清時代末期（19～20世紀）	A003223	
	<p>「手のひらで開く花の宴」 表面は透けて見えるほど薄く作られた磁器杯で、十二月の花文様が五彩で描かれ、花の詩句が青花で書かれています。底裏には「大清康熙帝年製」の銘がみられます。元々は酒杯であったと考えられますが、煎茶の茶の色がよく分かるよう、内側が白い磁器が好まれて転用されています。</p>				
18	染付煎茶碗	瀬戸窯・川本半助 （四代）	江戸時代末期～明治時代 （19世紀）	A000837	
	<p>「染付紅一点」 川本半助は愛知県瀬戸の郷地区で「山半」「真陶園」と号して六代にわたって陶磁器生産を行った窯屋です。四代は主に染付磁器を製作しており、尾張徳川家の御焼物師に任ぜられています。花の部分に紅く描いた染付茶碗で、口縁には虫喰い表現が、底裏には「大明成化年製」の銘がみられます。</p>				
19	青花烹茗図盤	中国・景德鎮窯	清時代前期（17世紀）	A003191	
	<p>「盤面に描かれる中国文人の世界」 松の樹の下で文人が書を読みながら茶を喫し、童子が茶を煎じる情景が描かれています。また、松の横には鶴がおり、「烹茗鶴避煙」の文字と丸印・角印も描かれています。北宋の詩人魏野の「烹茶鶴避煙」にちなみ、「良い茶をいれると鶴がその湯気をよける」という吉祥の文句も添えられています。</p>				

⑦話題のやきものコーナー「源内焼」

会期：2025年4月1日（火）～7月6日（日）

会場：本館2階通路

担当：植田 直子（愛知県陶磁美術館 学芸員）

佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



〔展示概要パネル〕

「源内先生に聞いてみよう！」—今年の大河ドラマでは、たびたびこのセリフを耳にします。頼るのは葛屋重三郎や江戸の人々だけではありません。劇中では、江戸幕府の老中・田沼意次でさえも、源内の見識を高く評価していました。

それもそのはず、源内は本草学（現代でいう薬学、植物学、科学、医学などを網羅した学問）を修め、二度の長崎遊学を通して蘭学などの海外事情にも通じていました。さらに、戯作や浄瑠璃などの作家としても才能を発揮しました。これらの活動を通して、源内の周りには次第に人々が集まり、大きなネットワークが形成されていったのです。

〔解説パネル〕

源内焼とは？

源内は、幅広い人脈と本草学の知識を活かし、日本各地の資源を活用して産業を創出しようとした。やきものに関心を寄せたのも自然な流れと言えるでしょう。

源内焼は、1755（宝暦5）年に、源内の出身地である讃岐国志度（現在の現在・香川県さぬき市）で操業していた志度焼が、源内の指導を得て焼いたやきものと考えられています。特徴としては、緑色や褐色などの単色または三彩で装飾され、型を使って特に口縁部を複雑な形に成型した軟質施釉陶器（低い温度で焼いた陶器）であることですが、なによりも注目を集めるのは、世界地図、中国の風景、縁飾りなど、日本とも西洋とも言い難い独特の題材が混在した意匠です。

ネクスト伊万里を探せ！『陶器工夫書』

源内の二度目の長崎遊学で、天草（現在の熊本県）において磁器の原料となる陶石に着目しました。17世紀中頃～18世紀中頃にかけて、西欧では有田窯（現在の佐賀県）の磁器製品、いわゆる「伊万里焼」が高い人気を誇りました。しかし、18世紀も中頃以降になると、圧倒的な生産量を誇る中国製品に押され、輸出量は減少していきました。

源内は『陶器工夫書』において、伊万里焼や、同地域の唐津焼、平戸焼（現在の長崎県）に代わる産業として天草の陶石を使った磁器が輸出品になり得ると、天草代官の掛斐十太夫に進言しています。しかし、この進言は聞き入れられなかったようです。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	交趾釉地図文稜皿	源内焼	江戸時代中期（18世紀）	A001077
	「江戸の人が見る世界」 『唐土訓蒙図彙（山川輿地全図）』（享保4年（1719年）刊行）という中国の百科全書を基にしています。地図は源内焼の特徴的な意匠の一つであり、当時の人々の知識欲を掻き立てるものでした。地図版には他に「ユーラシア・アフリカ大陸」、「日本列島」が知られています。（「民」印銘）			
2	三彩竜宮文手付扇面鉢	源内焼	江戸時代中期（19世紀）	A005814
	「竜が住む城郭」 手付きの扇面形の鉢に小碗が付くという、珍しい器形です。描かれているのは、中国の楼閣や旗がなびく様子から竜宮城と海の神である竜神のようにも見えますが、一方でヨーロッパの古城に住むドラゴンのようにも見えます。			
3	黄釉楼閣文鉢	源内焼	江戸時代中期（19世紀）	寄託作品
	「デザイン三種盛り」 皿の中央には中国の楼閣が描かれ、その周辺には、籠目文様やヨーロッパの紋章を思わせる意匠が施されています。本作には、江戸時代中～後期に流行した中国文人趣味と、和のモチーフ、西欧の要素が混在しており、まさに源内焼の特徴を表していると言えるでしょう。			
4	三彩鳥文稜皿	源内焼	天明2年：1782	A001527
	「平引皿」「天明二年」ほか箱書			

■第2期

会期：2025年7月29日（火）～11月30日（日）

会場：本館2階 展示室2-B

①特集展示「猿投」

担当：大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）



[展示概要パネル・解説パネル]

上記掲載済

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	須恵器 細頸瓶	猿投窯	古墳時代末期（7世紀）	A004716
	<p>「東へ動く猿投窯の須恵器、独特の造形」 猿投窯の須恵器生産は、5世紀前半の開窯以降、着実に発展を遂げていきました。既に5世紀代には愛知県内だけでなく一部県外でも出土が見られ、6～7世紀には関東地方にも出土が見られるようになります。本作も群馬県の古墳で出土したと伝わっています。丁寧な仕上げや硬い焼き上がりなど、猿投窯では全国的にも良質な須恵器を生産しました。本作は、理科の実験器具である丸底フラスコに似た形をしていますが、7世紀の猿投窯で流行した形です。</p>			
2	灰釉短頸壺	猿投窯	平安時代前期（9世紀）	A000888
	<p>「白と緑、地肌とガラス質のコントラスト」 猿投窯では9世紀に本格的な灰釉陶器が完成し著しく発達しました。左に展示中の8世紀末から9世紀初頭の作例と比べると、本作は地肌が白に近く、灰釉も暗緑色から緑色になり、須恵器とは異なる明るい発色の新たなやきものの完成を伝えています。本作は光沢のない白地に光沢のある緑の灰釉という、質感と色彩のコントラストが目を引きます。当時もこの新たなやきものに人々の関心が向けられたようで、東海、関東、近畿地方で蔵骨器などに使用されました。</p>			

	灰釉短頸壺	猿投窯	平安時代初期 (8 世紀末～9 世紀初頭)	A001306
3	<p>「灰釉陶器への試行、上等の骨壺」 8 世紀後半の猿投窯では、須恵器の壺などの肩にガラス質の層（灰釉層）を持つ作例が一定量現れます。本作も地肌の部分は褐灰色で、同時期の須恵器と見た目は変わりませんが、肩には暗緑色の灰釉層があります。こうした作例は原始灰釉陶器と呼ばれ、9 世紀の本格的な灰釉陶器に発展しました。本作のように口が短く立ち上がる壺は、8 世紀末から 9 世紀にかけて近畿や関東に多く運ばれ、火葬蔵骨器に使用されました。本作も中に人骨が納められて出土しました。</p>			
	緑釉椀	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	一宮市博物館蔵
4	<p>「最高級の国産陶器、緑釉陶器」 9 世紀の猿投窯は、本作のように、緑に発色する緑釉をかけた陶器の生産を始めました。緑釉は鉛や銅などの金属原料を的確に調合し、適温で焼く必要があり、先行して緑釉陶器を生産していた平安京周辺から技術導入されました。高度な技術が要求される緑釉陶器の産地は限られており、国産陶器の中で最高級の器でした。緑釉陶器は、当時の天皇や貴族たちの憧れだった、中国・唐の金銀器や青磁・白磁の形を取り入れたものが多く、本作も金銀器の形が元となったものです。</p>			
	灰釉手付瓶	猿投窯	平安時代前期 (9 世紀)	A002297
5	<p>「中国のやきものへの憧れ」 猿投窯の緑釉陶器や灰釉陶器には、より高級品として扱われた金属器や中国から輸入されたやきものを写したものがあります。本作は手付瓶と呼ばれる形で、中国・浙江省の越州窯の青磁を祖形にしています。本作は優美な輪郭を描く器形に板状の把手が付けられ、灰白色に焼き締まった地肌に淡い黄緑色の灰釉かかった、温かみのある色をしています。猿投窯の緑釉陶器や灰釉陶器の手付瓶は、平安京を中心に日本各地で出土し、酒など上等な液体を注ぐのに用いたと考えられます。</p>			
	突帯文四耳壺	猿投窯	平安時代末期 (12 世紀)	A001679
6	<p>「猿投窯最後の隆盛」 窯数の拡大や広域流通、緑釉・灰釉陶器生産の確立など、8～9 世紀は猿投窯のハイライトにあたる時期です。しかし、約 900 年で 1080 箇所が操業した猿投窯で、最後の 200 年にあたる 12～13 世紀にも約 450 箇所もの窯が確認されています。12～13 世紀の猿投窯は、椀などの地元向けの日用品を作る一方、本作のような特殊品も焼いています。本作は肩から胴に突帯をめぐらせ、肩に四つの耳を付けたもので、中国産の陶磁器などを模した可能性が考えられます。</p>			
	牡丹文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期 (11 世紀末～12 世紀初頭)	A000349
7	<p>「祈りを込めたタイムカプセル」 11 世紀から 12 世紀にかけて、仏教が衰退し世の中が大いに乱れるという考えが広がり、人々は仏教の教科書である経典を未来に伝えようとししました。当時の貴族や僧侶達は経筒と言う銅製の筒に巻物状の経典を入れ、本作のような外容器に入れて埋めました。猿投窯は 11 世紀末になると釉薬を放棄し、地域の人々の日用雑器を大量に焼くようになりますが、本作のような特別な需要にも対応しました。描かれた牡丹の花は華やかで、当時の貴族や僧侶の好みを反映しています。</p>			
	白磁四耳壺, 三筋文四耳壺, 灰釉四耳壺	中国福建省閩江地域, 猿投窯, 瀬戸窯	南宋時代 (12 世紀), 平安時代末期 (12 世紀), 鎌倉時代 (12 世紀)	A005752, A000468, A001520
8 9 10	<p>「日本で大人気 国産のモデルとなった中国産」 「国産四耳壺 耳だけでなく三筋も特徴」 「輸入品を国産化」 日宋貿易の拡大で、11～12 世紀に中国産陶磁器の輸入が増加しました。ここに 3 点展示中の内、左側は中国福建省の四耳壺です。四耳壺は肩に四つの耳を持つ壺で、拡大する需要に応えるため、国産の四耳壺が求められました。3 点展示中の内、中央は猿投窯で製作された四耳壺で、9 世紀を中心に積極的に中国産磁器の形を取り入れた</p>			

	猿投窯が、12世紀にも同様の課題に取り組んだ様子がうかがえます。3点展示中の内、右側は瀬戸窯の四耳壺で、13世紀以降生産を拡大していきました。			
11	棧敷1号窯跡出土品	猿投窯	平安時代前期(9世紀中葉)	A007414
12	匣鉢片(「淳和院」刻書)	猿投窯	平安時代前期(9世紀中葉)	A007414
	<p>「上皇の皇太后や親王の居所用の器が焼かれた」 本資料群の出土した棧敷1号窯跡は愛知県豊明市にあった窯跡です。「淳和院」の刻書がある匣鉢片がありますが、淳和院とは淳和天皇(786~840)が833年に譲位した後の院御所で、淳和上皇崩御後は皇太后が親王と同居しました。 匣鉢は緑釉陶器の素焼きと施釉後の本焼きの際に、燃料の灰や窯の天井からのゴミがつかないように保護するための入れ物です。すなわち淳和院用の緑釉陶器がこの窯で焼かれていたことが分かります。</p>			
13	緑釉陶器素地	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	愛知用水関連資料
14	青磁碗	中国・越州窯	唐時代(9世紀)	寄託作品
15	灰釉椀	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	愛知用水関連資料
16	青磁四足壺	中国・越州窯	唐時代(9世紀)	A006019
17	灰釉四足壺	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	A002304
18	緑釉緑彩三足盤	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	愛知用水関連資料
19	猿投窯と尾北窯の緑釉陶器	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	個人蔵及び愛知用水関連資料
		尾北窯		愛知用水関連資料
20	各地の緑釉陶器	京都府京都市洛北窯	平安時代前期~中期(9~10世紀)	A001269
		滋賀県近江窯		個人蔵
		岐阜県美濃窯		個人蔵

②特集展示「古瀬戸」

担当：大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）



[展示概要パネル・解説パネル]

上記掲載済

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料 登録番号
1	灰釉木ノ葉文瓶子	瀬戸窯	室町時代（14世紀）	A001809
2	鉄釉巴文瓶子	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A000899
	<p>「二大釉薬・鉄釉、二大装飾法・印花」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中で、灰を原料とする灰釉と並ぶ二大釉薬の一つが鉄釉です。鉄釉は鉄を原料の一つに用いる釉薬で、灰釉に遅れて13世紀末頃に導入され、本作のように茶色や黒に発色します。 本作の表面には三つ巴の文様があります。これは木片に文様を刻んだスタンプを表面に押し当てる印花と呼ばれる技法で、画花と並ぶ古瀬戸の二大装飾法です。本作は瓶子と呼ばれる中国の磁器に由来する酒器用の形です。</p>			
3	灰釉鉄流し瓶子	瀬戸窯	室町時代（15世紀）	A000406
	<p>「漆器写しの酒器、二大釉薬の合わせ技」 古瀬戸の中で、本作のように肩が張り小さな口を持つ瓶子は、約300年間作られた代表的な形です。12世紀末から14世紀前半の瓶子は、左に展示している2点のように梅瓶と呼ばれる中国の磁器を祖形とした形です。対して本作は、根来塗りの漆器の瓶子を祖形とする新たな形式の瓶子で、14世紀後半から登場します。 古瀬戸の釉薬には灰釉と鉄釉があり、どちらか一方を施すことが圧倒的に多いですが、本作のように灰釉を基本にしつつ鉄釉を流し掛ける作例もあります。</p>			
4	灰釉牡丹文瓶子	瀬戸窯	室町時代（14世紀末～15世紀初頭）	個人蔵
5	灰釉水注	瀬戸窯	鎌倉時代（13世紀）	寄託作品
	<p>「金属器がモデル、古瀬戸前期はシンプル」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中には、金属器がモデルの形もあります。本作のような注口の基部に菊花のように刻み目が付けられ、底に高台を持ち、口が受口状になる水注は、僧侶が心身を清めるため手を洗う際に用いる金属器が当初のモデルです。多くの古瀬戸製品では、12世紀末～13世紀半ば頃まで、本作のように文様を積極的に施すことはありません。その後13世紀末～14世紀前半を中心に文様を積極的に施すようになりました。</p>			
6	鉄釉印花文環耳花瓶	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A001225
	<p>「仏教用の花瓶、金属器や中国産磁器を模倣して」 12世紀の平安時代末頃から、地元で使う椀・皿などの食器の他に、産地によっては大量生産・広域流通する「壺・甕・鉢」という中世のやきものを象徴する3種セットが生まれました。猿投窯から伝播した常滑窯でもこの3種セットが作られ、本作は壺にあたります。肩から胴に三段の横線を持つ三筋壺で、12世紀の常滑窯の代表的な壺です。この三段の横線は、仏教思想、木製品の形、中国のやきものの文様、金属器の形など、何を表したのか様々な案が出ています。</p>			
7	灰釉魚文四耳壺	瀬戸窯	室町時代（14世紀）	A000743
8	萱刈窯跡出土品	瀬戸窯	鎌倉時代末期（14世紀前葉）	A007586

③特集展示「茶器濟濟」

担当：田畑 潤（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



[展示概要バナー・解説パネル]

上記掲載済

[出品作品および解説]

組/NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
茶の湯	1	肩衝茶入	瀬戸窯	江戸時代前期（17世紀） A001537
	2	黒織部茶碗	美濃窯	安土桃山時代（16～17世紀初頭） A002487
	3	白地縄簾筒水指	瀬戸窯・加藤吉右衛門	江戸時代（19世紀） 寄託作品
4	灰釉平碗	瀬戸窯	室町時代（14世紀）	A001818
	<p>「日常にある灰釉の美」 瀬戸窯の平茶碗として比較的後出の、やや浅くひらく形状の碗で削り出し高台をもつ日常の器です。灰釉は底部を除いて施釉され、見込みに鮮やかな淡緑色の釉溜まりが生じています。口縁部が金継ぎで補修されており、いつの間にか茶の湯用の茶碗に見立てられた作品です。</p>			
5	志野塔松樹文茶碗	美濃窯	安土桃山時代（17世紀初）	寄託作品
	<p>「ゆがんだ形に絵筆が走る！」 半筒形を基本としつつ動的な歪みや凹凸を加えるなど様々な変化を試みた茶碗です。大胆な形にも引けを取らない、闊達な筆遣いによる楼閣山水や三本の松樹が鉄絵で描かれています。たっぷりとかけられた白濁色の長石釉と合わせて、絵志野の魅力が詰まった茶碗を味わってください。</p>			
6	黒茶碗 銘美男	樂左入/樂吉左衛門（六代）	1733年	寄託作品

7	建盞 (兎毫盞・禾目天目)	中国・建窯	南宋時代 (12~13 世紀)	A002752	
8	粉青無地刷毛目碗 銘「稲妻」	韓国	朝鮮時代 (16 世紀後半)	A004253	
9	青花花唐草文碗	ベトナム	黎朝 (16 世紀)	A003243	
	<p>「茶人に見出された茶碗・安南」 ゆるやかに外反する胴部にやや広く高い高台が付く青花の碗は、大きささまざまなものが量産されていました。見込みには梅のような花枝が描かれ、高台内には鉄錆が塗られています。側面に花唐草文、裾にラマ蓮弁文を描いたタイプは茶人に好まれ「安南」と呼ばれました。</p>				
煎茶	10	朱泥茶鉢	中国・宜興窯	清時代末期 (19 世紀)	A004092
	11	青花山羊文茗碗	景德鎮窯	清時代後期 (18 世紀)	A004089
	12	錫花鳥文托子 乾隆年製 款	日本または中国	江戸時代または清時代 (18~19 世紀)	研究資料
	13	朱泥一文字涼炉	常滑	明治時代~大正時代 (20 世紀)	A004034
	14	白泥湯罐	京都	江戸時代後期 (19 世紀)	A004072
	15	青花人物文茶心壺	中国・景德鎮窯	清時代末期 (19 世紀)	A003217
	16	黄釉瓢形水注	中国・缸瓦窯	明~清時代 (16~17 世紀)	A002766
17	五彩花文杯	中国・景德鎮窯	遼時代 (11 世紀)	A005385	
18	染付荒磯文煎茶碗	瀬戸窯・ 川本半助 (四代)	江戸時代後期 (19 世紀)	A003993	
	<p>「見本は中国古染付」 川本半助は愛知県瀬戸の郷地区で「山半」「真陶園」と号して六代にわたって陶磁器生産を行った窯屋です。四代は主に染付磁器を製作しており、尾張徳川家の御焼物師に任ぜられています。荒波の上を翔ける麒麟を描いた染付茶碗で、口縁には虫喰い表現が、底裏には「大明成化年製」の銘がみられます。</p>				
19	青花烹茗図盤	中国・景德鎮窯	清時代前期 (17 世紀)	A003191	

④特集展示「灰と長石のあいまに」

担当：岩渕 寛（愛知県陶磁美術館 陶芸館 指導員）

大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）

佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）

佐藤 一信（愛知県陶磁美術館 館長）

入澤 聖明（愛知県陶磁美術館 学芸員）

澤井 祐輝（愛知県陶磁美術館 学芸員）



[展示概要パネル]

植物を燃やした際に発生する灰は、陶磁器の構成要素の一つ「釉薬」を考える上で欠かせません。鎌倉時代以降、釉薬を施したやきものを連綿と作り続けてきた瀬戸、また瀬戸の前身となった古代の陶器産地・猿投窯のやきもの作りも例外ではなく、瀬戸のやきもの作りは、灰とともに歩まれてきたとも言えるでしょう。

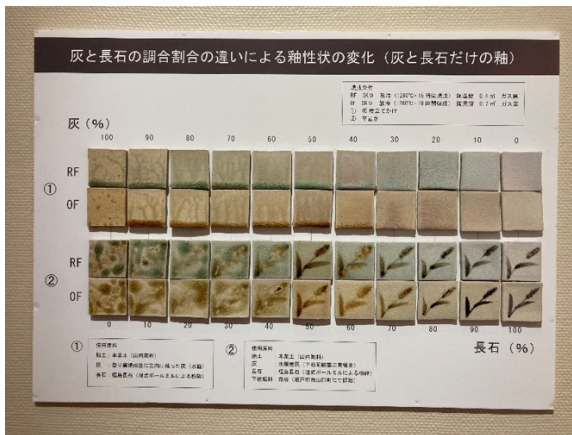
一方、鉱物の一種である長石は、やきものの原料である粘土に含まれているだけではなく、釉薬の原料としても灰と並び重要な存在です。灰と長石により灰釉、長石釉、透明釉はもちろん、酸化鉄、酸化銅等の金属分を若干量加えることで様々な色の釉薬が生み出されてきました。

本展示では、灰を一つのテーマとした国際芸術祭「あいち 2025」灰と薔薇のあいまに（2025年9月13日～11月30日）の開催を契機として、瀬戸を基軸として灰と長石という視点から捉えたやきもの世界を紹介します。

[解説パネル]

灰と長石の調合割合の違いによる釉性状の変化（灰と長石だけの釉）

（当館陶芸館においてテストピースを焼成し、それらを貼り付けたパネルを作成）



古代 猿投窯の自然釉・原始灰釉・灰釉

燃料である草木を燃やした際に生じる灰は、縄文土器の時代から作り手にとって身近な存在でした。しかし、灰が器表面を覆うガラス被膜である釉と関連するようになるのは、4世紀末～5世紀初頭の須恵器の出現を待たねばなりません。須恵器は窯を用いて1100℃以上で焼かれましたが、窯の中では1200℃以上の高温となる位置もあり、薪が燃えて舞い上がった灰が器の表面に付着すると、結果的に灰と粘土が反応して器面に灰釉層が形成されます。「自然釉」の発見です。

5世紀～7世紀頃の人々は、滑らかな質感や光沢感を持つ自然釉に対し関心を高めていったようで、この効果を人工的に生み出そうという動きが8世紀後半～9世紀の猿投窯で加速しました。猿投窯では、8世紀後半から原始灰釉陶器と呼ばれる壺等の肩の全体に灰釉層を持つ作例が生み出されるようになり、9世紀には液体状の釉薬として灰釉を調合し、器表面に塗布して焼き上げることで灰釉陶器を完成させました。

中世 渥美窯・瀬戸窯の灰釉

9世紀に完成した古代の灰釉陶器は、猿投窯やその技術が伝播した東海諸窯で盛んに焼かれましたが、11世紀末に一端終焉し、灰釉を施さない無釉陶器へ転換しました。その中で、12世紀に例外的に灰釉を施したやきものを製作したのが愛知県田原市周辺の渥美窯でした。渥美窯の灰釉製品は、器表面の大部分に灰釉を施しているものもありますが、多くは壺の肩等一部に施されています。

渥美窯の灰釉製品は12世紀中に終焉を迎えますが、代わって鎌倉時代初期の12世紀末には、瀬戸窯で灰釉を施した陶器の生産が開始されました。当初の瀬戸窯の灰釉は、釉層が薄く木灰単味と考えられていますが、徐々に長石質の材料を加えることで釉層の厚い安定した灰釉へ改良されていきました。

瀬戸窯は中世で唯一釉薬を施した陶器を焼き続けた産地で、製品は古瀬戸と称されますが、灰釉に加え鉄釉も生み出しました。鉄釉は黒褐色に焼き上がりますが、灰釉をベースに若干の鉄分を加えた釉薬です。

願いを込めて作られた守護獣たち

やきもので作られた狛犬のことを陶製狛犬と称します。

瀬戸や美濃では、13世紀末頃には陶製狛犬が制作されていました。瀬戸市、名古屋市、関東の著名な神社などには、灰釉や鉄釉が丁寧に施された室町時代の狛犬が伝世しています。これらの神社に伝わる狛犬は、獅子・狛犬の規範に忠実に作られているものが多く見受けられます。

江戸時代になると、「一般の人々による奉納」という形で納められたものが急増します。そのため、願いの種類に合わせて姿形がどんどん変化していったようです。本来の「獅子と狛犬」という姿を離れて、規範にとらわれず自由奔放に制作された様子が見受けられます。

近世Ⅰ 中世の灰釉・鉄釉をベースに、美濃窯で革新が起こる

安土桃山時代（16世紀後半～17世紀初頭）、日本陶磁の形・色・文様に大きな革新が起こりました。この時期に瀬戸・美濃において生産された、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部などは、それまでのやきものとは大きく異なった新たな世界を展開したのです。

瀬戸・美濃が他の地域に先駆けてこうしたやきものを生産できたのは、「大窯」の導入によるものです。大窯は、それまでの窯よりも高温で焼成できるため、灰釉に溶解温度が高い黄土など配合することが可能となり黄瀬戸釉が登場します。また、鉄釉を焼成中に窯から取り出し急冷する瀬戸黒も開発されました。長石を主体にした志野釉と、その釉の下に鉄絵具を含ませた筆で絵付する下絵付も始まりました。

16世紀末頃に九州から「連房式登窯」が導入されると、より効率の良い焼成が可能になります。酸化銅を配合した織部釉や、下絵付がより鮮明に見える透明釉も登場し、躍動する時代を反映するかのよう、創意あふれる様々な形・色・文様の器が誕生していきます。

近世Ⅱ 磁器の誕生と、さらに発展する釉薬

江戸時代初期になると、尾張藩によって美濃の陶工が瀬戸に呼び戻され、瀬戸のやきもの生産が再び活気づきます。また、尾張藩の御庭焼として御深井焼が創始されました。その釉薬として印象が強いのは、木灰の中の鉄分によって灰青色あるいは黄色味を呈する御深井釉です。

19世紀になると磁器焼成に成功し、加藤民吉が柞灰を使用した透明釉の技術を九州から伝えますが、柞の木は九州では自生するものの瀬戸の土地には根付かず、貴重なものでした。磁器の釉薬としては、酸化鉄を呈色材に用いた青磁や、酸化コバルトを含む呉須を呈色材に用いた瑠璃釉も登場しました。従来作ってきた陶器の方にも、藁灰を配合した卵の斑釉などが登場し、呂宋と呼ばれる緑釉を全面に用いた製品も江戸の町で人気となりました。

こうした多色の釉薬は瀬戸のやきもの大きな特徴となっていますが、それらはすべて釉薬の発色を活かすことのできる瀬戸の陶土があってこそのものであります。

近代 明治時代～大正時代 灰釉（木灰）から石灰釉（石灰）への大転換

日本では磁器釉には、柞灰が使用されてきましたが、明治期の海外輸出拡大にあわせ、品質改良と材料の大量かつ安定的な確保のため、石灰石（炭酸カルシウム）が用いられるようになりました。

明治3年（1870）、佐賀藩の委嘱を受け、ドイツ人化学者ゴットフリート・ワグネル（1831-1892）が有田に赴き、石灰に転換する釉薬調合を教授しましたが、その時点では普及しませんでした。一方、瀬戸・美濃では、一部で明治以前より石灰釉の使用が始まったとされますが、詳細は不明で、全体としては同24年の濃尾大地震以後、石灰釉への転換が著しく進みました。

京都では、柞灰が年々高額になり、かつ品質が一定しないことから、同31年に京都市陶磁器試験所が滋賀県及び高知県産の石灰石を用いて石灰釉の試験に取り組み、これを清水の磁器及び栗田の陶器に応用することに成功しました。

石灰釉は廉価な上に安定した質を保つことが出来、明治後半期から大正期にかけて、これを基礎釉として、マット釉や失透釉など新たな釉薬が生み出され、窯業の発展に大きく役立ちました。

現代Ⅰ 表現としての灰釉

明治期以降の窯業技術の近代化にともない、大正期には科学的な知見に基づく釉薬表現を模索する個人作家が登場する一方、灰釉やそれをベースとした釉薬の技法が、美術表現として美的価値と結びついて評価されるようになるのは、昭和初期に始まる桃山復興のムーブメントと、それに続く伝統工芸の概念が大きな要因として挙げられます。

桃山復興の騎手となった加藤唐九郎や荒川豊蔵は、古窯跡の発掘を通して当時の素材や制作技法の実態を明らかにしつつ、桃山陶に肉薄し、さらには現代的な解釈をともなう作品を作り上げました。このような姿勢は、地域に根ざした素材や技法の再評価につながりました。

ここでは、作り手でありながら先駆的に古窯の学術調査を手がけた加藤唐九郎の「黄瀬戸」、志野の産地を特定した荒川豊蔵の「鼠志野」、石炭窯で薪による焼成を試みた加藤舜陶や、古常滑に倣いつつ新たな表現を目指した江崎一生らの「灰釉」の作品を紹介しています。

現代Ⅱ 素材を超えて

さらに時代が下った70年代には、「土から陶」という制作過程自体を再考するメタ陶芸とも呼べる表現が登場します。なかでも焼成という行為は、陶芸において本質的であるの

と同時に、物質に不可逆な変化をもたらす現象として、作家たちの思考の対象となりました。この過程で生じる「灰」は、同時代的な社会の出来事を背景としつつ、単なる副産物にとどまらず、当時の社会的文脈、特に戦争や原発事故といった時代の影に呼応するモチーフとなりました。

ここでは、原爆の記憶を主題とした荒木高子の《原爆の証言》、チェルノブイリ原発事故を契機に制作された鯉江良二の《チェルノブイリ・シリーズ》を紹介しています。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	釜戸長石、三河石粉(砂婆)、平津長石、福島長石、大平長石	—	—	—
	<p>「陶磁器における長石の役割」 陶磁器の表面を被覆する釉の大切な原料です。高温で焼く時に溶けた状態になって反応を進める融剤です。素地（本体）にも含まれ、周りの成分と反応して溶けてガラスを生成し隙間を埋め、つなぐ役割があります。高温で焼くやきものにとって、なくてはならないものです。陶磁器にしようされる長石は、カリ長石とソーダ長石で、ここに並んでいるのはすべてカリ長石です。長石中のカリウムとナトリウムの量や割合は産出する地方によって異なるため、同じ温度で焼成しても溶け方が違います。使用するときは、どの地方の長石かを確認してから使う必要があります。植物の灰やアルカリ土類（石灰石、マグネサイトなど）を混合するとそれぞれの長石が単独で溶ける温度より低くなり、溶かすことを補うことができます。</p>			
2	栗皮灰、土灰、松灰、イス灰、ナラ灰、愛陶登り窯の灰	—	—	—
	<p>「灰の色、いろいろ」 灰の量や種類により、個性的な色や表情の釉を生み出します。松の木のように鉄分が多いものは還元焼成では淡緑色に、酸化焼成では黄瀬戸のような色になります。イス灰のように鉄分の少ない灰は、染付などの透明釉に使われます。木を焼き、燃料にする状況が存在した時代は、生活の中で「灰」が生み出され、様々な活用がされていました。炎を見ることも少ない現代では、灰は特別なものとなってしまいました。当館では毎年薪窯の焼成を行っています。焼成後に窯の中に残った「灰」とその灰を使った釉薬のテストピースを展示しています。</p>			
3	須恵器 蓋付短頸壺	猿投	古墳時代後期（6世紀）	A004713
	<p>本器は蓋の天井や壺の肩にたつぷりと自然釉がかかっています。自然釉は、当初から滑らかな質感や光沢感が付加価値と捉えられた可能性もありますが、作り手からすると失敗につながる厄介事だったとも推察されます。本器は蓋を被せた状態で焼かれましたが、自然釉により蓋の口の先端が壺の肩部に釉着し、若干破損しています。</p>			
4 5	須恵器 灰釉短頸壺 須恵器 灰釉長頸瓶	猿投 猿投	平安時代初期（8世紀末～9世紀前葉） 奈良時代（8世紀）	A001684 寄託作品
	<p>「肩の全面に灰釉層、ハケ塗り痕は見当たらず」 左の2点は、灰釉層を人為的に得る試行錯誤中の作例です。肩の全周に灰釉層が認められますが、液体状の釉薬をハケ塗り等して施した様子は認められません。双方とも原始灰釉陶器と分類されますが、窯の中で自然釉のかかりやすいところへ意図的に窯詰したか、肩にあらかじめ灰を置く等の行為を行ったか、製法は未解明です。</p>			
6	灰釉椀	猿投	平安時代前期（9世紀）	A001528
7	灰釉鳥形平瓶	猿投	平安時代前期（9世紀）	A002239

8	灰釉四耳短頸壺	猿投	平安時代後期 (11世紀)	A001567
	<p>「猿投窯、灰釉陶器の完成へ」 原始灰釉陶器を経て、猿投窯では平安時代に灰釉陶器を完成させました。左の3作中、右の灰釉四耳壺は灰釉陶器の典型例で、器表面に液体状の灰釉をハケ塗りして焼き上げています。3作の内左の2作はハケ塗り痕こそ認められないものの、安定して灰釉層が認められ、地肌自体も灰釉陶器に特徴的な白い焼き上がりを見せています。</p>			
9	灰釉四耳短頸壺	猿投	平安時代中期～後期 (10世紀～11世紀前葉)	A001651
	<p>「本格的な灰釉陶器、ハケ塗り痕が明瞭」 猿投窯の灰釉は、9世紀中葉頃から明らかに器の表面にハケ塗りの痕が認められるようになります。本器も表面に大胆に灰釉がハケ塗りされた様子が見て取れます。本器のような本格的な灰釉陶器と、左奥の作例のような原始灰釉陶器を比べると、灰釉にハケ塗りの痕が見られるか否か、器面の色が黒灰色系か灰白色系か等、大きな違いがあります。</p>			
10	須恵器 灰釉多口瓶	猿投	平安時代初期 (8世紀末)	A002287
	<p>「猿投窯の原始灰釉、製法は未だ謎のまま」 本器は肩の全周に厚く灰釉層を持ちますが、左奥の作例が表面に灰釉をハケ塗りした痕が良く残るのに対し、本器はハケの痕が見えません。こうした作例は、本格的な灰釉陶器に先行する原始灰釉陶器と位置付けられ、黒灰色の地肌は未だ須恵器と同様です。製法は自然釉のかかる位置に窯詰したとする説と、灰を器面に乗せて焼いたとする説があり、未解明のままです。</p>			
11	灰釉壺	渥美	平安時代末期 (12世紀)	A007412
12	灰釉壺	渥美	平安時代末期 (12世紀)	A001329
13	灰釉蓮弁文壺	渥美	平安時代末期 (12世紀)	A001440
	<p>「猿投と古瀬戸の灰釉の間を埋める渥美の灰釉」 渥美窯の灰釉は、11世紀末の猿投窯をはじめとした東海諸窯の灰釉の消失から、12世紀末の古瀬戸の灰釉出現までの間を埋める特異な存在です。左の3作はいずれも渥美窯で灰釉が施された作例です。3作の内、左1作は口から底のあたりまで広く灰釉が施されているのに対し、右2作は口から肩の部分のみに灰釉が施されています。</p>			
14	須恵器 灰釉長頸瓶	湖西	飛鳥時代 (7世紀後葉)	A007413
	<p>「湖西窯でも灰釉が試行されていた!？」 日本の灰釉は猿投窯で8世紀後半に原始灰釉として試行され、9世紀に完成したとされます。しかし、静岡県西部の湖西窯やその周辺の須恵器窯でも、7～8世紀に灰釉が試行された可能性が指摘されています。本器は肩や頸元に灰釉層があり、さらに頸の側面に灰釉が丸く付着しています。これは灰釉を肩に施す際に誤って付着した可能性が高く、湖西窯での灰釉の試行がうかがえます。</p>			
15	灰釉瓶子	瀬戸	鎌倉時代 (13世紀)	A000690
16	灰釉瓶子	瀬戸	鎌倉時代 (13世紀)	A001521
	<p>「古瀬戸でも古手の灰釉製品」 左右2作とも瓶子と呼ばれる形で、祖型は中国・韓国陶磁、漆器の梅瓶です。瓶子の多くは酒器で、腰が左のように直線的なものと、右のように曲線的なものがあります。双方とも古手の古瀬戸で、灰釉の塗りムラも多いですが釉層自体も薄めです。粘土自体の鉄分が渥美窯の製品に比べ少なく、渥美窯よりも灰釉が明るく発色しています。</p>			
17	灰釉牡丹文瓶子	瀬戸	鎌倉時代 (14世紀)	A001572
18	灰釉菊花文瓶子	瀬戸	鎌倉時代 (14世紀)	A001812
19	灰釉直線文広口壺	瀬戸	鎌倉～室町時代 (14世紀)	A005701
20	灰釉牡丹文瓶子	瀬戸	室町時代 (15世紀)	A001172

	「古瀬戸の灰釉の進歩」 古瀬戸の灰釉は初期の釉層が薄目なものから、徐々に灰釉に長石質が加わり釉層の厚みが増します。13世紀末～14世紀中頃の作例は、厚みがあり縞状に流れが生じた変化に富む灰釉が目立ちます（左4作中左2作）。一方安定性に課題も残り、灰釉が剥落した作例も目立ちます（左4作中左から3作目）。14世紀後半以降、更に灰釉が安定して均質な表情になります（左4作中右）。			
	鉄釉手付水注	瀬戸	室町時代（14世紀）	A001347
21	「鉄釉も灰釉がベース」 古瀬戸の釉薬には灰釉と鉄釉があります。鉄釉は灰釉よりも遅れて13世紀末に登場し、本作のように灰釉とは異なる黒褐色の色調が特徴的です。色の見た目が大きく異なるため、釉薬の成分も全く異なるように見えますが、実はベースが灰釉であることは変わらず、若干の鉄分が付加されることで黒褐色に発色します。			
22	灰釉狛犬 呷	瀬戸	室町時代（15世紀）	A000488
	口をしっかりと閉じた「呷形」です			
23	鉄釉狛犬 阿	瀬戸	室町時代（15世紀）	A000490
	口を大きく開けて吠える「阿形」です			
	御深井釉狛犬 阿呷	瀬戸・美濃	江戸時代（18-19世紀）	A000608
24	「ひょうきんな表情が魅力」 江戸時代に入ってから作られた狛犬は、室町時代のものに比べるとずいぶんと親しみやすく見えます。本作は、内部に大きく空洞を設けた顔の成形方法や、台座からはみ出ている大きな躰などが特徴です。特注品である狛犬は、量産される器とは異なりコレと決まった作り方が定まっていなかったため、作り手によって技法もさまざまだったことが推測されます。			
	黄瀬戸杵形火入	美濃	安土桃山時代（16-17世紀初頭）	A000141
25	「艶やかな黄色が出せるようになった」 織田信長の産業振興政策により、瀬戸から美濃に陶工が移り、美濃の窯業は一躍時代の最先端に躍り出ることになります。大窯で焼かれた桃山陶として最初に登場するのが黄瀬戸です。灰釉に微量の鉄分を含む黄土を配合することで、黄色の発色を得ています。文様は刻文が主流で、タンパンという酸化銅を用いた緑色のアクセントが施されることもあります。			
	志野陶片 一括	美濃	安土桃山時代（16-17世紀初頭）	A002478
26	「一口に“志野”といっても…」 美濃で採取された志野の陶片です。一口に志野と言っても、こちらの箱をご覧くださいと、釉の透明度や表面の気泡や貫入などが実にさまざまであることに気づかされます。釉薬に用いる長石や灰の成分や量の違いや、焼成した時の状況により、多様な変化が生じています。			
	織部洲浜形向付	美濃	安土桃山時代（16-17世紀初頭）	A001412
27	「型成形・不思議な文様・多色使い」 色鮮やかな織部釉と鉄絵の文様をくっきりと見せる透明釉をはじめ、織部はさまざまな革新的要素を有しています。型成型による自由な形、時に解釈不明の不思議な文様を描いたり、さらに、赤土を用いて素地も2色を組み合わせるなど、場を華やかに楽しく演出する器が大量につくられました。			
	織部竹文三足皿	美濃	江戸時代前期（17世紀）	A001772
28	「釉で描くという発想」 織部釉をたっぷりと掛けた盛期の織部と異なり、釉を鉄絵の文様のアクセント程度に流し掛けしています。この類は「弥七田織部」と呼ばれ、岐阜県可児市の弥七田窯で特徴的に焼かれていることに由来します。時代の流行がより繊細で綺麗さを感じさせるものに移行し始めたことがわかります。			

	御深井釉角形香炉	瀬戸	宝暦7年(1757)	A001298
29	<p>「いっどこで作られたかがわかる貴重例」 本作のような奉納用の角形香炉には、奉納した人物の銘が記されていることがあり、製作年代を知ることができる貴重な情報となります。たたらづくりの香炉に、呉須で銘を書き、その上からやや濁りのある御深井釉がたっぷりと施されています。(「三州」「加納村 薬師 奉上 庵」「尾州 せと村 水野武へエ」「宝暦七」染付銘)</p>			
	卯の斑釉手鉢	瀬戸 加藤春岱	江戸時代(19世紀)	寄託作品
30	<p>「薫灰によって得られる深みのある白」 卯の斑釉とは、光沢のある白濁釉を指します。薫をはじめイネ科の植物の灰を配合することで白く乳濁した色合いを得ることができます。本作は、瀬戸の赤津村の名工・春岱の作で、萩焼を写したものと考えられています。類作もいくつか存在することから、人気のある器種だったようです。(高台内「春岱」小判型印銘)</p>			
	緑釉朝顔貼付文瓶掛	瀬戸	江戸時代(18世紀)	A005948
31	<p>「凸凹+緑釉=流行のアイテム」 「ルス(呂宋)」と呼ばれる、金属器を模した形に、光沢のある緑釉(まれに黄釉や褐釉)と、凹凸のある文様を組み合わせた製品です。瀬戸での磁器生産ができなかった時期に多く生産されていました。江戸時代中期の絵師・喜多川歌麿の絵に幾度か登場することからも、単なる生活の道具ではなく、おしゃれな流行のアイテムだったようです。</p>			
	染付松竹梅文茶碗	瀬戸	江戸時代(19世紀前半)	A006984
32	<p>「瀬戸の磁器が誕生！」 瀬戸では、享和元年(1801)に16家の窯屋が磁器製造へ転向し、本格的に磁器生産がはじまりました。しかし、最初期の瀬戸の磁器は、当時国内で最先端の磁器産地であった有田窯と比較すると、課題が多かったと考えられます。そこで加藤民吉が九州へ赴き、文化4年(1807)に九州から窯や原土、釉薬などの技術を伝え、瀬戸の染付磁器の発展に資したと言われていています。(底に「享和年製」染付銘、「尾張」印)</p>			
	青磁硯	瀬戸 加藤吉右衛門	文政3年(1820)	A000399
33	<p>「微量の鉄分を青緑色に発色させる」 江戸時代の瀬戸の青磁は、染付と比較すると数が少なく、どのような技術を学び始めたのか詳しくはわかっていません。本作は、加藤民吉の兄・吉右衛門の名と文政3年の作とわかる銘が入っている貴重な資料です。瀬戸の磁器生産が始まってからまもなく、本作のような良質の青磁が完成していたことが分かります。(底に「文政庚辰年花月 應 鈴公需製 尾張瀬戸陶工穎溪」染付銘)</p>			
	瑠璃釉竹節形水指	瀬戸	江戸時代(19世紀前半)	A007537
34	<p>「天然呉須をたっぷり使っています」 酸化コバルトが鮮やかな青色に発色した瑠璃釉の水指です。瀬戸においては、瑠璃釉は青磁と同様、磁器生産が始まってまもなく開発されたようです。ただし、当時、呈色材となる天然呉須の採掘は許可制であり、希少な天然呉須を多量に用いるこうした濃い発色の製品は尾張藩の特別な注文品や返礼品として作られたと考えられます。(底に「尾張」小判形印)</p>			
	瑠璃釉竹節形水指	瀬戸	江戸時代(19世紀前半)	A007537
35	<p>「天然呉須をたっぷり使っています」 酸化コバルトが鮮やかな青色に発色した瑠璃釉の水指です。瀬戸においては、瑠璃釉は青磁と同様、磁器生産が始まってまもなく開発されたようです。ただし、当時、呈色材となる天然呉須の採掘は許可制であり、希少な天然呉須を多量に用いるこうした濃い発色の製品は尾張藩の特別な注文品や返礼品として作られたと考えられます。(底に「尾張」小判形印)</p>			

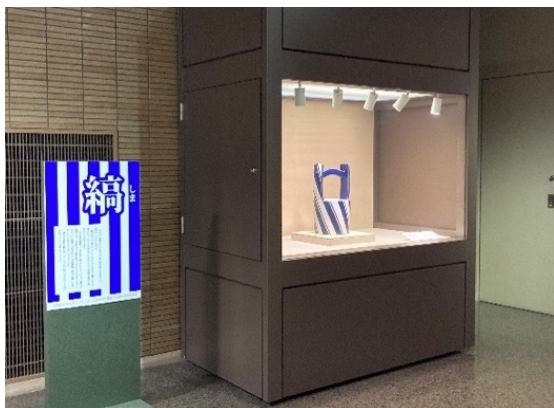
⑥話題のやきものコーナー「縞文のやきもの」

会期：2025年7月8日（火）～8月24日（日）

会場：本館2階通路

担当：佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）

植田 直子（愛知県陶磁美術館 学芸員）



〔展示概要パネル〕

今回の「話題のやきもの」は、暑い夏に涼をお届けする、「縞文」のやきものです。

線が並んだ「縞文」はとてもシンプルながら線の太さを変えたり、ねじりを加えたりすることで、多様な変化を付けることができます。

江戸時代後期（十九世紀）に焼かれるようになった瀬戸の磁器には、この縞文を大胆に取り入れたものが多く見られます。白い磁器に、染付あるいは瑠璃釉で縞文を施した器は、とても爽やかで夏にぴったりです。縞文の着物を粋に着こなした、江戸時代の女性たちの浮世絵とともに楽しみください。

〔出品作品および解説〕

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	瑠璃釉貼付縞文手桶	瀬戸窯	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
	<p>とても潔い、大胆な縞文 大きな斜めの縞文が大胆に取り入れられた、迫力ある手桶形の器です。花入などに用いられたと考えられます。瀬戸では、19世紀になって磁器が焼けるようになると、まもなく瑠璃釉も手がけ、さらにそれまでに培った貼付の技術を活かして本作のような立体的な文様を組み合わせた製品を作り出しました。</p>			
2	瑠璃釉貼付縞文水盤	瀬戸窯	江戸時代後期（19世紀）	寄託作品
	<p>水生植物を植えて、爽やかに 江戸時代中～後期は、園芸文化も花開いた時代でした。水盤は、石菖などの水生植物や金魚などを入れて楽しむ鉢の一つです。瀬戸では陶器・磁器ともに多くの水盤が作られました。本作は、粘土板を型にはめ込み成型した、六角の水盤です。鏝の部分には、染付で文様が施されています。</p>			

	染付捻文鉢、皿	瀬戸・川本樹吉	江戸時代後期 (19世紀)	A007754, A007755
3	<p>ねじり縞がとってもモダン 瀬戸の染付の技が冴える作です。染付で高台周りを六角形に囲み、六角形の各辺から濃紺～白まで4段階の濃淡の差をつけた帯を捻じりながら伸ばし、口縁で文様を途切れさせず、内側面を経て見込み中央まで帯を延ばしていきます。ダミ筆の跡がはっきりと残りますが、染付の発色は極めて良く、大変爽やかな印象を与えています。(高台内「奇陶軒北半」染付銘)</p>			

■第3期

会期：2025年12月13日（土）～2026年3月31日（火）

会場：本館2階 展示室2-B

①特集展示「猿投」

担当：大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）



[展示概要パネル・解説パネル]

上記掲載済

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料 登録番号
1	須恵器蓋付短頸壺	猿投窯	古墳時代後期 (6世紀)	A004713
	<p>「自然釉にはリスクもある」 本器は蓋の天井や壺の肩にたっぷりと自然釉がかかっています。自然釉は当初から滑らかな質感や光沢感が付加価値と捉えられた可能性もありますが、作り手からすると失敗に繋がる厄介事だったとも推察されます。本器は蓋を被せた状態で焼かれましたが、自然釉により蓋の口の先端が壺の肩部に釉着し、若干破損しています。</p>			

	須恵器灰釉長頸瓶	猿投窯	奈良時代（8世紀）	Y000104
2	<p>「肩全面に灰釉層 ハケ塗り痕は見当たらず」 灰釉層を人為的に得る試行錯誤中の作です。肩の全周に灰釉層が認められますが、液体状の釉薬をハケ塗り等して施した様子は認められません。原始灰釉陶器に分類されますが、窯の中で自然釉のかかりやすいところへ意図的に窯詰めしたか、肩にあらかじめ灰を置く等の行為を行ったか、製法は未解明です。</p>			
	灰釉四耳短頸壺	猿投窯	平安時代中期～後期 (10～11世紀前半)	A001567
3	<p>「猿投窯と言えば灰釉陶器！」 灰釉は植物の灰を主原料とした釉薬で、本作も器面に灰釉が大胆に塗られて光沢を持っています。灰釉は現在にも使用される基本的な釉薬の一つで、これを一早く完成させ、大量に灰釉陶器の生産を行ったのが猿投窯です。猿投窯の灰釉陶器は全国に運ばれましたが、本作は中でも珍しい肩に四つの耳を持つ壺です。</p>			
	緑釉椀	猿投窯	平安時代前期（9世紀）	一宮市博物館蔵
4	<p>「最高級の国産陶器、緑釉陶器」 9世紀の猿投窯は、本作のように、緑に発色する緑釉をかけた陶器の生産を始めました。緑釉は鉛や銅などの金属原料を的確に調合し、適温で焼く必要があり、先行して緑釉陶器を生産していた平安京周辺から技術導入されました。高度な技術が要求される緑釉陶器の産地は限られており、国産陶器の中で最高級の器でした。緑釉陶器は、当時の天皇や貴族たちの憧れだった、中国・唐の金銀器や青磁・白磁の形を取り入れたものが多く、本作も金銀器の形が元となったものです。</p>			
	灰釉手付瓶	猿投窯	平安時代前期（9世紀）	A002297
5	<p>「中国のやきものへの憧れ」 猿投用の緑釉陶器や灰釉陶器には、より高級品として扱われた金属器や中国から輸入されたやきものを写したものがあります。本作は手付瓶と呼ばれる形で、中国・浙江省の越州窯の青磁を祖形にしています。本作は優美な輪郭を描く器形に板状の把手が付けられ、灰白色に焼き締まった地肌に淡い黄緑色の灰釉かかった、温かみのある色をしています。猿投窯の緑釉陶器や灰釉陶器の手付瓶は、平安京を中心に日本各地で出土し、酒など上等な液体を注ぐのに用いたと考えられます。</p>			
	突帯文四耳壺	猿投窯	平安時代末期（12世紀）	A001679
6	<p>「猿投窯最後の隆盛」 窯数の拡大や広域流通、緑釉・灰釉陶器生産の確立など、8～9世紀は猿投窯のハイライトにあたる時期です。しかし、約900年で1,080箇所もの窯が操業した猿投窯で、最後の200年にあたる12～13世紀にも約450箇所もの窯が確認されています。12～13世紀の猿投窯は、椀などの地元向けの日用品を作る一方、本作のような特殊品も焼いています。本作は肩から胴に突帯を巡らせ、肩に四つの耳を付けたもので、中国産の陶磁器などを模した可能性が考えられます。</p>			
7	牡丹文経筒外容器	猿投窯	平安時代末期（11世紀末～12世紀初頭）	A000349
8	白磁四耳壺, 三筋文四耳壺, 灰釉四耳壺	中国 福建省閩江地域 猿投窯 瀬戸窯	南宋時代（12世紀）, 平安時代末期（12世紀）, 鎌倉時代（12世紀）	A005752, A000468, A001520
9 10	<p>「日本で大人気 国産のモデルとなった中国産」 「国産四耳壺 耳だけでなく三筋も特徴」 「輸入品を国産化」 日宋貿易の拡大で、11～12世紀に中国産陶磁器の輸入が増加しました。ここに3点</p>			

	<p>展示中の内、左側は中国福建省の四耳壺です。四耳壺は肩に四つの耳を持つ壺で、拡大する需要に応えるため、国産の四耳壺が求められました。</p> <p>3点展示中の内、中央は猿投窯で製作された四耳壺で、9世紀を中心に積極的に中国産磁器の形を取り入れた猿投窯が、12世紀にも同様の課題に取り組んだ様子が見えます。3点展示中の内、右側は瀬戸窯の四耳壺で、13世紀以降生産を拡大していきました。</p>			
11	棧敷1号窯跡出土品	猿投窯	平安時代前期(9世紀中葉)	A007414
12	匣鉢片(「淳和院」刻書)	猿投窯	平安時代前期(9世紀中葉)	A007414
	<p>「上皇の皇太后や親王の居所の器が焼かれた」</p> <p>本資料群の出土した棧敷1号窯跡は愛知県豊明市にあった窯跡です。「淳和院」の刻書がある匣鉢片がありますが、淳和院とは淳和天皇(786～840)が833年に譲位した後の院御所で、淳和上皇崩御後は皇太后が親王と同居しました。</p> <p>匣鉢は緑釉陶器の素焼きと施釉後の本焼きの際に、燃料の灰や窯の天井からのゴミがつかないように保護するための入れ物です。すなわち淳和院用の緑釉陶器がこの窯で焼かれていたことが分かります。</p>			
13	緑釉陶器素地	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	愛知用水関連資料
14	青磁碗	中国・越州窯	唐時代(9世紀)	寄託作品
15	灰釉椀	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	愛知用水関連資料
16	青磁四足壺	中国・越州窯	唐時代(9世紀)	A006019
17	灰釉四足壺	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	A002304
18	緑釉緑彩三足盤	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	愛知用水関連資料
19	猿投窯と尾北窯の緑釉陶器	猿投窯	平安時代前期(9世紀)	個人蔵及び愛知用水関連資料
		尾北窯		愛知用水関連資料
20	各地の緑釉陶器	京都府京都市洛北窯	平安時代前期～中期(9～10世紀)	愛知用水関連資料
		滋賀県近江窯		A001269
		岐阜県美濃窯		個人蔵

②特集展示「古瀬戸」

担当：大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）



[展示概要バナー・解説パネル]

上記掲載済

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料 登録番号
1	灰釉木ノ葉文瓶子	瀬戸窯	室町時代（14世紀）	A001809
2	鉄釉巴文瓶子	瀬戸窯	鎌倉時代（14世紀）	A000899
	<p>「二大釉薬・鉄釉、二大装飾法・印花」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中で、灰を原料とする灰釉と並ぶ二大釉薬の一つが鉄釉です。鉄釉は鉄を原料の一つに用いる釉薬で、灰釉に遅れて13世紀末頃に導入され、本作のように茶色や黒に発色します。 本作の表面には三つ巴の文様があります。これは木片に文様を刻んだスタンプを表面に押し当てる印花と呼ばれる技法で、画花と並ぶ古瀬戸の二大装飾法です。本作は瓶子と呼ばれる中国の磁器に由来する酒器用の形です。</p>			
3	灰釉鉄流し瓶子	瀬戸窯	室町時代（15世紀）	A000406
	<p>「漆器写しの酒器、二大釉薬の合わせ技」 古瀬戸の中で、本作のように肩が張り小さな口を持つ瓶子は、約300年間作られた代表的な形です。12世紀末から14世紀前半の瓶子は、左に展示している2点のように梅瓶と呼ばれる中国の磁器を祖形とした形です。対して本作は、根来塗りの漆器の瓶子を祖形とする新たな形式の瓶子で、14世紀後半から登場します。 古瀬戸の釉薬には灰釉と鉄釉があり、どちらか一方を施すことが圧倒的に多いですが、本作のように灰釉を基本にしつつ鉄釉を流し掛ける作例もあります。</p>			
4	灰釉牡丹文瓶子	瀬戸窯	室町時代（14世紀末～15世紀初頭）	個人蔵
5	灰釉水注	瀬戸窯	鎌倉時代（13世紀）	寄託作品
	<p>「金属器がモデル、古瀬戸前期はシンプル」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中には、金属器がモデルの形もあります。本作のような注口の基部に菊花のように刻み目が付けられ、底に高台を持ち、口が受口状になる水注は、僧侶が心身を清めるため手を洗う際に用いる金属器が当初のモデルです。 多くの古瀬戸製品では、12世紀末～13世紀半ば頃まで、本作のように文様を積極的</p>			

	に施すことはありません。その後 13 世紀末～14 世紀前半を中心に文様を積極的に施すようになりました。			
	鉄釉印花文環耳花瓶	瀬戸窯	鎌倉時代（14 世紀）	A001225
6	<p>「仏教用の花瓶、金属器や中国産磁器を模倣して」 中世の瀬戸窯の釉薬をかけた陶器、いわゆる古瀬戸の中で、花瓶は形を変えつつ約 300 年間生産された主要な形の一つです。花瓶は香炉や燭台とともに仏教儀式の三具足として用いられ、本来は金属器製である他、中国から輸入される磁器の花瓶もあり、瀬戸窯ではこれらの代用品として花瓶を製作したと考えられます。 本作は、胴の部分に花形のスタンプを押す印花の技法で装飾され、表面には鉄を原料の一つとして用いる鉄釉が施されています。</p>			
7	灰釉魚文四耳壺	瀬戸窯	室町時代（14 世紀）	A000743
8	萱刈窯跡出土品	瀬戸窯	鎌倉時代末期（14 世紀前葉）	A007586

③特集展示「瀬戸の染付磁器」

担当：佐久間 真子（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）



[展示概要パネル]

白い磁肌に青い染付が施された染付磁器。硬く丈夫で清潔感があり、様々な文様が楽しめる染付磁器は、日本においては 1600 年代初頭に現在の佐賀県・有田窯で最初に焼かれ、国内でも高い人気を呼びました。

ここ瀬戸では、長いやきものづくりの歴史がある一方で、単味で磁器となる陶石が産出しないことから磁器の開発は容易ではありませんでした。19 世紀初頭、有田窯に 200 年近く遅れて本格化した瀬戸の染付磁器は、江戸時代後期の人々の生活に磁器を大量にもたらしとともに、明治時代になると洋食器など新たな生活様式にも対応して生産を続け、また、海外で開催される万国博覧会などでその技と美が認められるようになります。

この特集展示では、初期から近代までの瀬戸の染付磁器を紹介します。

[解説パネル]

染付磁器の開発と発展

江戸時代中～後期の瀬戸では、有田窯の生産量に押された影響で窯業がひっ迫する中、磁器生産が急務とされました。瀬戸は陶石が産出しない土地でしたが、18世紀末～19世紀初頭にかけて、素地土の調合や窯の改良など様々な開発を重ねたことで、磁器焼成に成功しました。

享和元年（1801）には16家の窯元が磁器作りに転業し、従来生産してきた陶器は「本業」、新たに生産が始まった磁器は「新製」と称されるようになります。また、文化元年（1804）には加藤民吉が九州に旅立ち、数年間の修行で学んだ技術を持ち帰ったことで、生産技術が向上していきました。

陶器生産で培った洗練された成形や装飾技術、南画系絵師の介在がうかがえる山水画をはじめとした絵付けなどが瀬戸の染付磁器の特徴です。名工と名高い川本半助や川本治兵衛の活躍を筆頭に、複雑な立体装飾、瑠璃釉や青磁釉、転写の開発など、技術の幅も急速に広がっていきました。

時代に合わせて

江戸時代後期～幕末にかけて、有田窯・瀬戸窯という2大磁器産地により、食文化だけでなく、室内装飾、園芸、文房具など人々のあらゆる生活シーンの中に磁器が浸透しました。生活の質を向上させた瀬戸の染付磁器は、明治時代以降も時代に合わせて様々に姿を変えていきます。

明治政府は、殖産興業や輸出振興そして万国博覧会への出品に力を入れ、瀬戸の染付磁器生産もそれに応えました。洋食器や、日本の技術力を海外に示すための大形の製品などが数多く作られ、上絵付け工場が集中していた名古屋市内への輸送路の整備なども進みました。

また、明治から大正・昭和初期にかけては、ヨーロッパからの技術導入も盛んに行われたと見られます。のちに精巧な瀬戸ノベルティの生産につながる石膏型による成形技術や、石炭窯、重油窯の導入などがなされました。

圧巻の重箱

料理を詰める箱型の容器である重箱。ハレの日の食事の主役を担う器です。重箱は、多くは漆塗りで作られますが、瀬戸の染付磁器では重箱が多く見られます。板状の粘土をゆがみなく箱形に成形し、積み重ねた際にガタつきが出ないように歪みなく焼き上げ、さらに華やかな染付を施すという、瀬戸の技術の粋を集めたものと言えるでしょう。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	染付山水図花瓶	瀬戸 加藤民吉 (伝)	江戸時代後期 (19世紀)	A000124
	<p>「瀬戸の染付磁器、誕生」 瀬戸の磁祖として名高い加藤民吉 (1771-1824) の作と伝わる花瓶です。民吉は、磁器生産において九州に後れを取っていた瀬戸に、現地に赴いて学んだ技術を伝えたとされます。本作は、花瓶の全面に楼閣山水や人物が細かく描き込まれており、南画系絵師が絵付に関わったという、瀬戸の染付磁器の特徴がよく表れています。</p>			
2	染付山水図水指	瀬戸 加藤忠治 (伝)	江戸時代後期 (19世紀)	A001769
	<p>「のびやかな山水図が特徴」 加藤忠治 (生没年不明) は、民吉とともに瀬戸の磁器開発を担っていたことで知られます。忠治の作とされる染付の特徴は、呉須をたっぷり用いてのびやかな山水図を描く点にあります。忠治作される重箱や植木鉢なども伝わっており、瀬戸は食器に限らず磁器生産が本格化してすぐに様々な器形に挑戦していたようです。</p>			
3	染付花鳥文手付手焙	瀬戸 川本治兵衛 (三代)	江戸時代後期 (19世紀)	A007734
	<p>「巧みな器形と文様」 川本治兵衛は、江戸時代の瀬戸の磁器を代表する窯屋です。特に三代治兵衛 (不詳～1865) は、中国磁器の写しをはじめ、素地土の改良や瑠璃釉の開発など意欲的な制作を行いました。本作は、器形の巧みさとそれを可能にする技術に加えて、多くのモチーフを詰め込みつつもバランスよく整えた絵付など、治兵衛の佳作の一つとされるべきものと言えます。(高台内「魁陶園製」染付銘)</p>			
4	染付四君子文食器揃	瀬戸 川本半助 (四代～六代)	江戸時代後期 (19世紀)	A007591- A007598
	<p>「きちんと揃った美しさ」 染付の四君子文の器が整然と並ぶ、食器揃いです。皿、小皿、鉢、膾皿、蓋付碗、大小の猪口が揃っています。皿などの「針木形」とは、輪花形の口縁の一部が外に鋭く尖った形を言います。器の器壁は、いずれも程よい厚みで食器としての実用に耐える堅牢さがあります。川本半助は輸出用製品も手掛けましたが、こちらは国内向けの実用品と考えられます。(「真陶園半介製」染付銘)</p>			
5	染付花鳥図植木鉢	瀬戸 川本榊吉 (初代) 画：大出東皐	江戸時代後期 (19世紀)	寄託作品
	<p>「瀬戸に滞在した南画家」 背の高い角形の植木鉢です。外側面には、染付で楚々とした雰囲気の花鳥図と漢詩が描かれています。これを描いた大出東皐 (1841-1905) は、明治期に活躍した南画家で、明治3年 (1870) に瀬戸を訪れ、同13年 (1880) まで滞在しました。その間、川本榊吉、川本半助、加藤周兵衛、川本利吉などの窯屋において絵付けを行いました。(「川本榊吉製」「東皐迂史寫」染付銘)</p>			
6	染付鳳凰唐草文洋食器	瀬戸 加藤周兵衛 (初代、二代)	明治時代 (19世紀)	A001707, A003046, A007760
	<p>「輸出用の洋食器」 加藤周兵衛 (初代：1819-1900、二代：1848-1903) は、瀬戸の南新谷地区で「白雲堂」と号した窯屋です。主に米国・英国向けの食器を生産しましたが、二代亡き後は工場は完全に閉鎖されました。本作をはじめ、周兵衛が手掛けた洋食器は、薄い素地の華麗な器形に、鳳凰や唐草等の文様が精密に描きこまれているのが特徴です。(「白雲堂周兵製」染付銘)</p>			

	染付葵唐草文四段脚付重箱	瀬戸	明治時代（19世紀）	A007735
7	<p>「瀬戸の技術、極まる」</p> <p>大型の四段重箱です。全体に堅牢なつくりとなっているため、非常に重量もあり、これをほぼ歪みなく焼き上げる瀬戸の磁器焼成の技術の確かさを感じることができます。唐草文で全体を埋め、蓋の縁のみ幾何学文を施しています。染付の筆致は極めて細く、正確に引かれています。蓋に小さな葵の葉が3か所入れられています。</p>			
	染付孔雀牡丹文重箱	瀬戸	江戸時代末期～明治時代（19世紀）	A001134
8	<p>「一幅の絵画のように」</p> <p>岩で羽を休める堂々とした鳳凰が、重箱の蓋から側面にかけて大きく配され、大ぶりの牡丹も描き込まれており、まるで一幅の絵画のようです。鳳凰や牡丹の間を埋めるように細かく草花が描かれ、背景は染付で塗り込まれています。重箱の垂直な側面を存分に活かした良作といえるでしょう。</p>			
	染付四君子文四脚付重箱	瀬戸 加藤紋右衛門（六代）	江戸時代末期～明治時代（19世紀）	A007756
9	<p>「逸品を忠実に写して」</p> <p>本作は、亀井半二作「染付四君子文二段重」を写したものです。半二は、山本梅逸に師事し、文政年間に瀬戸へ赴き、川本治兵衛や川本半助らの窯において絵付けを行いました。「染付四君子文二段重」は、半二の逸品として知られていたのかもしれませんが、加藤紋右衛門（六代）はオリジナルをよく研究し忠実に写していますが、段数を三段に増やしています。 （底部「還情園池紋製」染付銘、蓋裏「乎子祖先貳百年祭器」染付銘）</p>			

④特集展示「This “Too” is SUEKIーもう一つの特別展！ー」

担当：田畑 潤（愛知県陶磁美術館 主任学芸員）

大西 遼（愛知県陶磁美術館 学芸員）

澤井 祐輝（愛知県陶磁美術館 学芸員）





[展示概要パネル]

Before SUEKI—須恵器の源流と根源—

須恵器は4～7世紀中葉の朝鮮半島・三国時代（高句麗、百済、新羅+加耶）の陶質土器製作技術を、渡来工人によって導入した外来系のやきものです。

朝鮮半島の陶質土器は1100度前後の高温・還元炎で焼かれた硬質・青灰色のやきもので、3世紀後半から7世紀前半にかけて流行しました。

高温・還元炎で焼かれたやきものは、さらに古い中国陶磁にみられます。紀元前15世紀、初期王朝時代に低温の灰陶から進化した1000度前後の灰陶、そして1200℃以上で焼かれた印文硬陶が出現しました。印文硬陶は、青銅器を模した器形や文様を持ち、叩きしめて成形される高度な技術が特徴です。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	灰陶鬲	中国・黄河中流域	西周時代後期（紀元前9～紀元前8世紀）	A005734
	<p>「青銅器由来の飾り付き土器」 灰陶の中でも比較的高火度で焼成された鬲で、三本足の直上に鱗状の装飾が付くことから、鑄型の合わせ目の装飾を持つ青銅器に倣った器形と考えられます。須恵器が登場するはるか古代から、中国では竪穴式の窯で1000度程度の還元炎焼成で作られた灰陶が用いられています。</p>			
2	印文硬陶壺	中国・華南	春秋時代前期（紀元前8～紀元前7世紀）	A006010
	<p>「スタンプによる叩き締めと装飾」 短い頸部で胴の長い壺で、還元炎焼成され、胎土に含まれる鉄分の影響から黒褐色になっています。肩から胴部中央に櫛目の波状文が、胴下部には方格雷文のスタンプが施されています。胴の両側には捻った粘土紐による装飾が貼り付けられています。初期王朝時代初期から造られ、施釉された原始青磁と同じ窯で焼成されていました。</p>			

	印文硬陶罐	中国・華南	春秋・戦国時代（紀元前8～紀元前5世紀）	A006025
3	<p>「背の低い壺を罐と呼びます」 長江南岸の江南地域では、釉をかけずに高温で焼き締めた印文硬陶が初期王朝時代から漢時代にかけて流行しました。 胴部の上半分には櫛目の波状文が3段施され、下半分には方格雷文が横一列に施されています。胴の両側には粘土紐で耳が付けられていますが、穴はふさがっていません。</p>			
	[陶質土器] 無蓋高杯	韓国・新羅	三国時代（5世紀中葉）	A004166
4	<p>「須恵器に良くみられる高杯です」 杯に双耳と三本の突帯が付き、脚部に長方形の透かしが四方向設けられた高杯です。初期須恵器の祖形の一つで、蓋受けが伴わない深めの杯と脚部の透かしの形状から、5世紀頃に流行した新羅様式にみられるタイプの陶質土器と考えられます。須恵器の無蓋高杯との共通性から、その影響の強さが感じられます。</p>			
	[陶質土器] 広口壺	韓国・小加耶	三国時代（5世紀）	A007189
5	<p>「頸部の波状文に注目！」 平底の球形胴に広く開いた口が付き、頸部を凸帯と波状文で飾り、胴部には成形時の格子タタキ目が施されています。 これらの特徴から、加耶諸国の中でも固城を拠点とした「小加耶」の作と考えられます。特に頸部の文様構成は日本の須恵器と共通しており、両者の深い関連性を示しています。</p>			
	[陶質土器] 壺	韓国・大加耶	三国時代（5世紀後半）	A004230
6	<p>「細かいウェーブ櫛目文」 球形の胴部に長く立ち上がった頸部を持つ壺で、頸部には三段の櫛目文帯が施されています。これらの特徴から、5から6世紀の加耶諸国の明主であった「大加耶」の作と考えられます。 やや丸底でこのままでは不安定であることから、この種の器は器台に乗せて、墓の副葬品として用いられていたと考えられます。</p>			
	[陶質土器] 台付壺	韓国・阿羅加耶	三国時代（5世紀後半）	A003014
7	<p>「脚線美」 短頸壺に脚部が付いた形状をした陶質土器です。短い頸部は蓋受けと考えられ、本来は蓋を伴っていたと考えられます。胴部は横線で区画され、下二段には縦方向の刻線が巡っており、脚部には長方形の透かし孔が三段に配置されています。これらの特徴から、加耶諸国の中でも咸安一帯を拠点とした「阿羅加耶」の作と考えられます。</p>			
	[陶質土器] 俵形壺	韓国・新羅	三国時代（6世紀前半）	A004161
8	<p>「転がる俵」 俵形の体部に口が付いた器で、片側が平たく他方が丸い左右非対称な形をしています。平らな側から粘土紐を巻き上げ、最後に粘土板で塞ぐ独特な技法で作られています。この作り方は日本の須恵器の「横瓶」や「提瓶」と共通するものです。形だけでなく製作技術の面でも、須恵器と深い関連を持っていたことを示す資料です。</p>			

SUEKI AGE—もっと見せます。須恵器コレクション！

4世紀末～5世紀初頭頃に朝鮮半島より技術が伝わり、陶邑窯（現在の大阪府南部）などで生産が始まった須恵器は、当時の人々にとって、生活に欠かせないやきものでした。

窯を用いて硬く焼き締められた須恵器は、液体が漏れづらいというメリットがありました。そのため、水を溜めたり酒などを醸造したりするための甕、それらを注ぐ瓶、そして飲食物を盛り付けるための杯など、幅広い用途の須恵器が製作され、当時の人々の需要に応えていきました。

ここでは陶邑窯をはじめ、猿投窯（現在の愛知県西部）や湖西窯（静岡県湖西市）など、日本各地で作られた幅広い用途を備えた須恵器を紹介します。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	提瓶	—	古墳時代後期（6世紀）	A001566
	<p>「妖しく黒光りする水筒」 提瓶は、潰れた玉のような形をした胴部の側面に、口頸部が取り付けられた器で、本作は粘土ヒモで作られた耳がついており、自然釉がかかっています。良く焼け締まっており、当時の須恵器生産の技術力の高さを窺えます。腰に付けたり、背中に背負ったりして、水筒のように持ち運んで使用されたと考えられています。</p>			
2	横瓶	伝・三重県答志島出土	古墳時代後期（7世紀）	A001795
	<p>「ちょっと丸っこい潜水艦」 横瓶は横長の胴部の側面に口頸部を付けたもので、6世紀から8世紀を中心に製作されました。主に液体の貯蔵容器として利用されたと考えられています。本作の胴部は内面に当て具を当て、外面を叩き板を用いて叩くことで形作られており、外面に叩いたときの叩き板の跡が残っています。</p>			
3	平瓶	静岡県御前崎市（旧・浜岡町）出土	古墳時代後期（6世紀）	A001650
	<p>「ボタンのような立派な装飾」 平瓶とは、潰れた玉のような形をした胴部の端近くに口頸部を取り付けた器で、酒などを注ぐ容器として用いられました。本作は、胴部上面に自然釉がかかり、ボタンのような突起が取り付けられています。これは遠江から駿河地方に多く見られます。時代が下ると上部に把手が取り付けられるようになります。</p>			
4	大型壺	岡山県邑久郡出土	奈良時代（8世紀）	A001547
	<p>「立派な屋根と注ぎ口」 壺は、口縁部が大きく開いた壺の胴部に小さな穴を開けた器です。7世紀以降の壺には、本作のように穴が突出したのが見られますが、突出した穴に管を挿して注口として使用していたと考えられています。本作は壺の中でも大きなもので、特徴的な広い口縁部を持ち、肩に自然釉がかかっています。</p>			
5	水瓶	陶邑窯	平安時代前期（9世紀）	A001942
	<p>「足りないからやきもので作ってみました」 水瓶とは、丸い胴部に細長い頸部が取り付けられた器で、仏前に水を備えたり、僧侶が飲用や洗浄用に水を入れたりするために使われたと考えられています。水瓶は、元々は金属製でしたが、仏教の拡大による不足を補うため、須恵器により代用品が作られました。本作も金属器の形を模しています。</p>			
6	蓋杯	—	古墳時代後期（6世紀）	A001791
	<p>「この形はジャパニーズスタイル」 杯は古代の須恵器の中では一般的な器形で、よく蓋と合わせて一対とされていました。当初は朝鮮半島の陶質土器に類似した土釜形の器形でしたが、5世紀中頃になると本作のような日本独自の形となりました。丸い底部が特徴ですが、7世紀以降は平底になり、蓋にはつまみ取り付けられるようになります。</p>			
7	高杯	—	古墳時代（6世紀）	A004714
	<p>「海を超えて繋がっています」 高杯は、下に脚が付いた器で、主に食物を盛り付けるために使用されました。本作は、脚部の3か所に窓が設けられ、胴部に自然釉がかかっています。須恵器の高杯は、朝鮮半島の陶質土器に影響を受けて作られ始めたもので、当時の日韓のつながりが感じられます。</p>			

	蓋付釜	—	奈良時代 (8 世紀)	A001327
8	<p>「須恵器を使ってクッキング」 現在の私たちがイメージする羽釜とよく似た形をしていますが、羽釜と比べて本作は羽が短いのが特徴です。円盤状の粘土板を蓋に張り付けたつまみが作られています。胴部には、実際に調理に使用したときに付いたと思われる煤が残っていることが分かります。</p>			
	三耳壺	猿投窯	奈良時代末期 (8 世紀)	A002382
9	<p>「大切に大切に納められていました」 本作は、ロクロを用いて成形されており、肩部に台形の粘土板を3か所貼り付け、棒状の工具で穴を空け、耳を表現しています。須恵器としては珍しく、赤褐色に焼き締められています。火葬蔵骨器として土の中に埋納されていたとされており、本来は蓋がかぶせられていたと考えられています。</p>			
10	堤瓶	猿投窯	古墳時代後期 (7 世紀前半)	A005705-
11	蓋杯	猿投窯	古墳時代後期 (7 世紀前半)	000002,
12	高杯形器台	猿投窯	古墳時代後期 (6 世紀中~後葉)	A005705-
	<p>「猿投の須恵器 古墳の副葬品」 ここに展示した蓋杯・堤瓶・高杯形器台の3件は、同一、あるいは近いエリアの古墳で出土した須恵器です。いずれも猿投窯で製作されたものです。これらの製作時期には、猿投窯はほぼ名古屋市内に窯がまとまっている段階でした。3件とも古墳時代後期の副葬品の代表的なもので、高杯形器台は、壺を上に乗せるための台です。</p>			
	細頸瓶	猿投窯	古墳時代後期 (7 世紀)	A001678
13	<p>「猿投得意のフラスコ形でも変わり種」 本作は猿投窯産の須恵器で、本作の作られた7世紀代には名古屋市や長久手市、日進市等に窯が多く、本作の出土地の可児市をはじめ、岐阜県東濃地域でも猿投窯産須恵器が流通しています。本作は球形の胴部が特徴的な細頸瓶、あるいはフラスコ瓶と呼ばれますが、その中でも頸部と口縁部の間に壺状の膨らみがある特異例です。</p>			
	横瓶	猿投窯	古墳時代後期 (7 世紀)	A001515
14	<p>「ラグビーボール+口」 本作は猿投窯で制作された須恵器で、本作の作られた7世紀には名古屋市や長久手市、日進市等に窯が多いですが、愛知県中西部の三河地域も猿投窯の主要流通圏です。 本作はラグビーボール状の胴部を作成した後、胴部中央を丸く切り取り開口し、そこを基部に口頸部を成形します。暗褐色の地肌が特徴的です。</p>			
	蓋杯四耳壺	猿投窯	古墳時代後期 (7 世紀)	A001797
15	<p>「猿投の須恵器海をわたる」 本作は猿投窯産の須恵器で、7世紀には名古屋市や長久手市、日進市等の他、やや離れて春日井市や小牧市等の尾北窯と呼ばれる地域にも、猿投窯の出張所と言える窯が増加します。本作は細い耳が肩に付けられた、7~8世紀に流行した壺です。伊勢湾沿岸に流通した猿投窯製品の一例です。</p>			
	甕	伝・瀬戸内地方出土	古墳時代後期 (7 世紀)	A001731
16	<p>「白っぽい須恵器 瀬戸内でも」 甕は、液体がしみ込みづらいという須恵器の性質を最大限に活かした形で、4世紀末の須恵器生産の開始期から、連綿と生産されました。 須恵器の色には灰色や黒灰色が挙げられますが、本作のようにかなり白っぽい明るい色調の製品もあります。瀬戸内地方では、岡山県の寒風窯等で白味の強い製品が知られています。</p>			

	長頸瓶	湖西窯	古墳時代後期 (7 世紀)	A002224
17	<p>「湖西窯は東日本太平洋側で大人気」 本作は静岡県西部の湖西市から、一部愛知県東部の豊橋市西部にまたがる湖西窯産の須恵器です。湖西窯の製品は東海地方東部から関東・東北等、東日本の太平洋側に広く流通しました。 湖西窯では、本作のように須恵器の中ではかなり白っぽい、明るい色調のものが目立ちますが、産出する粘土の特徴に起因すると考えられます。</p>			
	広口壺 広口壺	関東地方出土, —	平安時代 (9~10 世紀) 平安時代 (9 世紀末~ 10 世紀初頭)	A001285, A002694
18 19	<p>「奈良・平安関東の須恵器」 関東地方では、西日本や東海地方よりもやや遅れて、5 世紀後葉頃から須恵器生産が始まりますが、7 世紀後半以降、古代の寺院や役所の配置に伴い、生産が拡大していきました。 埼玉県の南比企窯、東京都の南多摩窯等、特に奈良・平安時代に大規模な生産が行われます。左 (A001285) は関東地方出土、右 (A002694) は関東地方産と考えられます。</p>			
	長頸瓶	東北地方出土	平安時代 (9~10 世紀)	A001280
20	<p>「奈良・平安東北の須恵器」 東北地方では 8 世紀の奈良時代以降に、大規模な須恵器生産が開始されますが、須恵器産地としては後進的です。従来、東北地方は蝦夷の世界で、関東以西とは異なる文化を有しました。 奈良・平安時代に、朝廷が東北地方への侵攻を行い、各地に支配拠点としての城柵が設置されるに連れて、須恵器の生産も北上していきました。</p>			
	須恵器灰釉長頸瓶	猿投窯	平安時代初期 (8 世紀 末~9 世紀初頭)	A002289
21	<p>「猿投の灰釉陶器へ至る道 原始灰釉」 愛知県東部の猿投窯では、8 世紀後半になると、本作のように壺や瓶類の肩部や口縁部上面に、全体に灰釉層を持つ作例が見られるようになります。地肌は暗灰色で、形の上でも須恵器に含まれるものですが、原始灰釉陶器と称されます。 自然釉のかかりやすい位置に窯詰する、窯詰時に灰を器面に乗せておく等、製法について両説があります。</p>			
	須恵器灰釉長頸瓶	猿投窯	平安時代後期 (7 世紀 後葉)	A007413
22	<p>「湖西窯の問題児 釉は自然か意図的か」 須恵器は 1,100℃以上で焼かれますが、1,240℃程の更に高温に達すると、燃料である薪の灰が被るところでは器面に灰釉層が発生します (自然釉)。これは偶発的な現象で、須恵器には意図的な施釉は行われていないとされています。 本作は頸の部分等に自然釉では理解しづらい灰釉の付着が数か所あり、偶発的か否か課題が残ります。</p>			
	装飾付台付壺	伝・京都府宇治市木幡 古墳出土	古墳時代後期 (6 世紀 前半)	A001415
23	<p>「ツボ・シカ・イノシシ」 多様な須恵器の形の中でも、特に複雑で装飾性の高い一群に、5~7 世紀の古墳時代に特徴的に作られた装飾性須恵器があります。本作のように壺に小壺と動物の小像を配する作例は、近畿や瀬戸内地方で良く見られ、本作は雌雄のシカ・イノシシの小像が配されています。壺には燃料の灰と粘土が反応して生じた自然釉がかかります。</p>			

After SUEKI—「無限大な時代」の、その後のカタチ—

古代のやきもの・須恵器は、時代の流れにより中世以降になると生産は縮小していきました。

しかし、完全に終焉したわけではなく、一部の地域では製作技術を受け継ぐ形で、引き続き生産が行われました。能登国（現在の石川県北部）で展開した珠洲窯や、備前国（現在の岡山県東部）で展開した備前窯などでは、これまでの須恵器とは器形や器種が異なりますが、製作技術はそのまま受け継いだやきものが生産されていました。

ここでは古代の技術と、中世のカタチが組み合わさった「中世の須恵器」を紹介しします。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
1	叩文壺	珠洲窯	鎌倉時代（13世紀）	A002352
	<p>「表面のギザギザはまるで波のよう」 珠洲窯は、平安時代末期に成立し、室町時代前期まで生産が行われました。本作は、粘土ヒモを積み上げて成形した後、叩き板で叩き締めながら仕上げられています。器壁の表面につけられた文様は、叩き具の文様がそのままつけられたものです。また、肩部には「十」字状の刻文があります。</p>			
2	瓶子	珠洲窯	室町時代（15世紀）	A001656
	<p>「珠洲窯のフィナーレはシンプルに」 本作は、ロクロを用いて成形されています。卵形の胴部と円筒形の口縁部で、肩部には白色の自然釉がかかっています。珠洲窯は須恵器の技術を受け継ぎ、叩きや灰黒色に焼き締めたやきものを生産していました。東北・北陸地方の日本海沿岸部に流通していましたが、16世紀頃に衰退の一途をたどります。</p>			
3	印花文双耳壺	珠洲窯	鎌倉時代（14世紀）	A000968
	<p>「肩に色々のせてみました」 粘土ヒモを積み上げて成形された後、全体的に叩きが施され、最後に器面を削って滑らかに仕上げられています。肩部には白いゴマをふったかのような自然釉が見られる他、粘土ヒモで作られた双耳が取り付けられ、11枚の花びらから成る菊の花の形をした印花文が3個押されています。</p>			
4	播鉢	珠洲窯	室町時代（15世紀）	A001289
	<p>「和食の文化、ここにあり！」 中世は中国から禅宗に伴い精進料理が伝わり、食生活の幅が広がりました。珠洲窯では、そのような需要に応える形で播鉢も作られました。本作は粘土ヒモを積み上げて成形し、口縁部には片口が一か所設けられています。内面には卸し目が付けられています。珠洲窯の播鉢に卸し目が付けられるのは12世紀になってからです。</p>			
5	仏像紐蓋付経筒外容器	珠洲窯	平安時代末期（12世紀）	A001333
	<p>「仏像は、裏側にもいます」 当時の日本では、釈迦の死後2,000年が経つと、仏法が衰え世の中が乱れるという「末法思想」が流行しており、経典を経筒に入れて埋納した経塚が各地に造られました。本作の蓋のつまみには、表裏に大日如来坐像と思われる彫刻が施されていますが、このような装飾が施されるのは極めて珍しい事例です。</p>			

6	樹文蓋付経筒外容器	珠洲窯	平安時代末期 (12 世紀)	A001334
	<p>「蓋がおしゃれなタイムカプセル」 当時の日本では、仏法が衰え世の中が乱れる「末法思想」から、経典を地中に埋納する経塚が盛んに造られました。珠洲窯では、その経典を中に入れて保護する経筒外容器も製作されました。本作は、筒身に櫛描文が、蓋のつまみに樹文が施されており、胴部には埋納したと思われる人物について刻銘されています。(胴部「わかやまのみさうたゝの こうのちうにん おちのためひさ 為久 (花押)」原文ママ刻銘)</p>			
7	櫛目文瓶子	備前窯	鎌倉時代 (13 世紀)	A002215
	<p>「カタチは滑らか、でも文様は鋭く」 備前窯は、須恵器の製作技術を受け継いだ形で、12 世紀頃に成立しました。本作は器壁の上半に直線的な櫛目文と、ノコギリの刃のようにギザギザした櫛目文が施されています。珠洲窯でも同じ器種が製作されていることから、全国的に瓶子の需要が高かったことが分かります。</p>			
8	櫛目文壺	備前窯	室町時代 (14 世紀)	A000255
	<p>「須恵器と別の道を歩みます」 備前窯の壺は、他地域の窯で製作された壺のような丸胴形ではなく、長胴形であることが特徴です。当初は須恵器のような黒灰色のやきものを製作していた備前窯ですが、13 世紀から次第に赤黒い製品を製作するようになりました。本作もまた須恵器と異なり、口縁部を外側に折り曲げ、肩部には波状の櫛目文が施されています。</p>			
9	四耳壺	珠洲窯	平安時代末期 (12 世紀)	A001335
	<p>「マネして作ってみました」 中世の始め頃は、中国宋代 (960 年～1279 年) に製作された白磁の四耳壺を模倣した四耳壺が全国各地で製作されるようになりました。本作は、円盤状の粘土板に粘土ヒモを積み上げて成形した後、器面をなでて整形しています。肩部には波状文を一周させ、板状の耳が 4 か所に貼り付けられており、自然釉も見られます。</p>			
10	櫛目印花文壺	珠洲窯	鎌倉時代 (13 世紀)	A000890
	<p>「これぞトリプルデザイン」 本作は、粘土ヒモを積み上げて成形した後、器面は滑らかに仕上げられています。口縁部は面を取られ、器面と同じく滑らかに仕上げられています。肩部には 2 段階に分けて波状文が描かれている他、桜を模したと思われる 2 種類の印花文が施され、合計 3 種類の装飾がされています。</p>			
11	樹文花瓶	珠洲窯	鎌倉時代 (14 世紀)	A000893
	<p>「肩をオシャレに」 珠洲窯は、平安時代末期 (12 世紀頃) に成立し、室町時代前期 (14 世紀頃) まで生産が行われました。本作は、粘土ヒモを積み上げて成形した後、器面をヘラで削って滑らかに仕上げられ、肩部に木の葉文が 2 か所描かれています。珠洲窯には、器面に植物を描いた壺類が多く見られますが、本作は中でも文様が簡略化されたものと考えられます。</p>			
12	小甕	珠洲窯	鎌倉時代 (14 世紀)	A001690
	<p>「小さくなっただけ」と思うなかれ」 本作は、大きく開いた口や、帯状に太く作られた口縁部など、珠洲窯の甕の特徴がよく残されています。しかし、他の甕と比べ、底部が直線的であることや、仕上げに内外面は叩かず、器面が滑らかに整形されていることなど、わずかに異なった技法で製作されていることが分かります。</p>			

	播鉢	珠洲窯	平安時代末期 (12 世紀)	A000894
13	<p>「食文化、広げてみました」 中世は、中国から禅宗に伴い精進料理が伝わり、食生活の幅が広がった時代でした。珠洲窯では、そのような需要に応えるため、播鉢も作られました。本作は、内外面を滑らかになで上げられ、現代の播鉢のように卸し目が付けられていませんが、珠洲窯では鎌倉時代 (13 世紀) 頃から内面に卸し目が付けられるようになります。</p>			
	播鉢	東播窯	鎌倉時代 (13 世紀)	A001075
14	<p>「実は私、珍しいんです」 東播窯は、播磨国東部 (現在の兵庫県東部) で平安時代後期 (12 世紀) に成立し、室町時代 (15 世紀) まで生産が行われていました。本作は、粘土ヒモを積み上げた後、丁寧になで上げられ、片口が付いています。東播窯の片口鉢に卸し目はほとんど付けられませんが、本作は内面に卸し目が付けられており、珍しい作例です。</p>			
	叩文甕	十瓶山窯	平安時代末期 (12 世紀)	A001075
15	<p>「四国でも叩かれます」 十瓶山窯は、讃岐国 (現在の香川県) で古墳時代 (7 世紀) に須恵器窯として成立し、その後も鎌倉時代後期 (13 世紀) まで断続的に生産が続けられました。本作は、粘土ヒモを積み上げて成形した後、器壁の内側に当て具をあて、外側からは叩き板で叩き締めながら仕上げられています。</p>			

Another SUEKI—変わり種の須恵器たち—

須恵器には、当時の人々の生業や生態系などを表現したものもみられます。食器や貯蔵具など、様々な人たちに広く使われたものから、文房具や漁具、動物などをかたどった祭祀の道具など、特定の人たちに使われたものまで、幅広い場面で須恵器は使われていました。

ここでは、変わり種の須恵器をはじめ、中国・朝鮮半島の動物形の土器を並べ、見て楽しいやきもの世界を紹介します。

[出品作品および解説]

NO	名称	産地・作家	時代	所蔵資料登録番号
	陶馬	猿投窯	平安時代初期 (8 世紀末～9 世紀初頭)	A002312
1	<p>「日本古来の馬はずんぐりむっくり」 馬の形をした須恵器です。現在イメージする馬と比べると、短足で全体的にずんぐりとしており、日本の在来馬を表していると考えられます。本作は、棒状の道具で目や尾毛、たてがみの毛並みが表現されています。馬の飼育は古墳時代に大陸から伝わり、荷物の運搬から戦いまで、あらゆる場面で人々に重宝されました。</p>			
	土馬	韓国	三国時代 (5～6 世紀)	A004160
2	<p>「こだわりの鞍」 頭が大きく身体が細い土器の馬です。全体的なフォルムや足などシンプルな作りですが、背には鞍の凸部がみられ、胴にも鞍の装飾が線彫りされています。素地は灰色で、表面には赤褐色の土をまっています。三国時代の馬は、現在の馬に比べて小型でしたが、強い持久力を備えていたのが特徴です。</p>			

	灰陶魚	中国	戦国時代（紀元前 5～ 紀元前 3 世紀）	A004942
3	<p>「身の詰まった魚」 表面全体に凸点の魚子文が施され、目・エラ・ウロコ・尾びれの線など細かい表現もみられる魚のやきもので、墓への副葬品と考えられます。 通常内部は空洞にしていますが、本作は塊状で 1000 度以上の高温・還元炎焼成で固く焼き締められています。黄河や長江といった大河や湖沼の淡水魚がモデルと考えられます。</p>			
	灰陶兎	中国	漢時代（紀元前 2～紀 元後 2 世紀）	A004947
4	<p>「太った兎は満月の見立て？」 丸みを帯びた大きく肥えた兎で、ブタ鼻と縦に割れた上唇が特徴です。 手捏ねで成形され、胴部の内側は中空になっています。1000 度以上の還元炎焼成で、灰色に焼き締まっています。漢時代の墓から出土する画像石や銅鏡には、月の象徴として兎の姿が頻繁に描かれています。</p>			
	灰陶犬	中国・華北	漢時代（紀元前 2～紀 元後 2 世紀）	寄託作品
5	<p>「墓を守る忠犬」 足が短く愛らしい表情の犬を象ったやきもので、赤い胎土で、1000 度前後で還元炎焼成されたため、灰褐色になっています。生前の主人の家を守っていた警備犬を象徴しており、漢時代の墓に鎮墓獣として副葬されたものと考えられます。中国河南省南陽煙荘で類品が出土しています。</p>			
	風字硯	猿投窯	平安時代前期（9 世紀）	A002309
6	<p>「硯の海に浮かぶ美しい三日月」 後部にのみ取り付けられた脚は、へら状の工具を用いて角が立てられており、縁から裏側にかけて自然釉がかかっています。墨汁を溜めていた海や、墨を擦る陸などが良く作られており、現代の硯と似た構造をしています。本作は窯の中で重ねて焼かれたのか、海に三日月状の陶片が溶着しています。</p>			
	鈴台付壺	—	古墳時代中期（5 世紀）	A001490
7	<p>「カラカラと音が鳴ります」 世紀頃の日本では、器形が特殊で量が少ない特殊須恵器が製作されるようになりました。本作は胴部と脚部に窓が 3 か所ずつ設けられており、胴部には土製の球が 3 個入れられており、それが鈴のように音を鳴らします。上部の壺と、球が入れられた空間部をそれぞれ別個に作ったものを接合して成形されています。</p>			
	蛸壺	陶邑窯	奈良時代（8 世紀）	A001961
8	<p>「今につながる伝統漁法」 粘土ヒモを巻き上げて成形されています。上部に空けられた穴に紐を通し、漁具として海に投げ入れ、イイダコなどの小型のタコを捕獲していたと考えられます。 岩陰に潜むタコの習性を利用したタコ壺漁は現代も行われていますが、当時からすでに須恵器を用いて行われていたことが分かります。</p>			
	文字瓦	陶邑窯	奈良時代（8 世紀）	A001962, A001963, A001967, A001970
9 10 11 12	<p>「自分のものには名前を」 瓦は古墳時代（6 世紀）頃に朝鮮半島を経由して日本に伝わり、寺院や官衙に積極的に取り入れられていきました。ここに並べた瓦の多くには、凸面に格子目の叩き痕が、凹面には布目痕が残されています。 また、いずれも寄進または強制的に貢納させられた人の名前と考えられる文字が書かれています。（胴部 A001962「七」「五百支」、A001963「大鳥連和田女」、A001967「荒田直」、A001970「勢臣和」原文ママ、いずれも刻銘）</p>			

	鳥形瓶	—	古墳時代後期（7世紀）	A001241, A001531
13 14	<p>「この世とあの世を橋渡し」</p> <p>本作は、鳥の胴体を模した横長の胴部を持ち、頭部にあたる部分が口縁部となっています。上部と口縁部の根元に鳥の羽を模したとされる列点文が付けられています。古代では、鳥はこの世とあの世を結ぶ動物であるとされており、本作のように鳥を模したものは、葬送儀礼に使われたと考えられています。</p>			